

協働のかたち ④ デザイナーとの協働

ひろば

連載：建築生産における協業を考える 第4回

覗いてみました他人の流儀

海外レポート

第5回 JIA 神奈川建築フォーラム 2021

未来へ継承したい風景

良質な建築、これからのまちづくり

オンラインセミナーの舞台裏

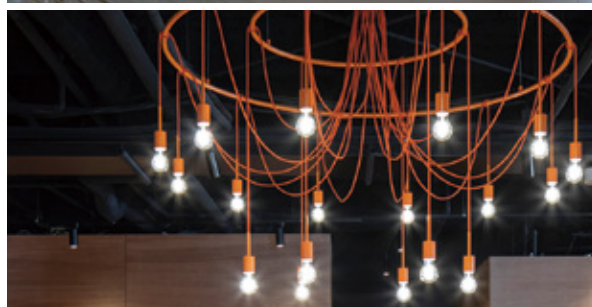
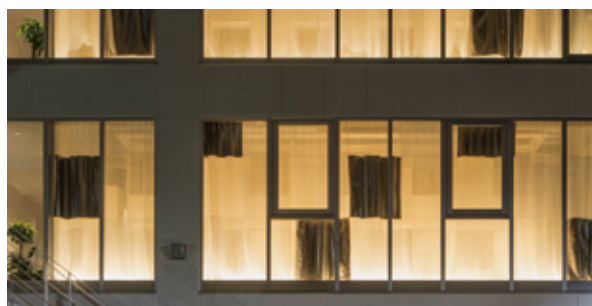
温故知新

活動報告

建築ウォームアップ

卒業設計をふりかえる

次世代のタマゴたち





防水材、床材ともに 時代の先を見据えた商品開発を続ける

田島ルーフィング株式会社は、1919(大正8)年に東京・三河島で建築用アスファルト防水材料を製造・販売する会社として設立。雨から建物を守る防水材料メーカーとして、アスファルト防水材をはじめ、合成高分子ルーフィングシートやウレタン系防水材などさまざまな商品を取り揃えています。また、床の仕上げ材の製造・販売も行い、ビニル床材やカーペットタイル、長尺シートなどを扱いながら、機能も充実させ、さまざまな建築物の幅広い用途に応えています。会社の成り立ちから、時代とともに進化を続ける製品について、田島国雄社長にお話をうかがいました。

アスファルト防水を 国内で初めて製造

当社は、1919年に私の祖父田島武長が創業しました。祖父は技術者で発明家でもあり、国鉄に勤めていた時に貨車の屋根に使う防水シート“パーマネントルーフィング”を発明。その技術をもって独立し、アスファルト防水材料を製造販売する会社を始めました。それまでアスファルト防水は国外品では存在しましたが、国内での製造は当社が最初です。

アスファルト防水は、初めは住宅の瓦の下葺き材に使われていましたが、陸屋根の建物が増えるにつれて需要が高まり、米軍施設や公団など大きな建物での採用をきっかけに一気に普及しました。

1950年にはアスファルトタイルの製造販売も開始。当時国内で床材タイルはつくられておらず、お客様からの要望でゼロから研究開発しました。塩化ビニル樹脂に可塑剤を添加して製造すると品質良く薄くできることに着目し、1953年には日本で初めて塩ビの床材「Pタイル」を発売しました。

機能性が重視される防水材とデザイン性が重視される床材で、要求されるものは異なりますが、お客様の要望に応えながら、それぞれの技術が相乗効果を生み発展してきました。

施工性の高い防水が 改修現場でも多く採用される

アスファルト防水は、改良を重ね

ながら現在も防水材の主流として使われていますが、当社ではその他にも用途により多岐にわたる商品を取り扱っています。

温度特性や耐久性能を高めた改質アスファルトシート防水は、溶かさず常温で接着できる工法と、バーナーでアスファルトを溶かして貼り合わせるトーチ工法などがあります。工期が短い塩ビ樹脂が原料の合成高分子ルーフィングシートや、複雑な部位でも施工可能なウレタン系の防水材は、改修現場で多く採用されています。

また、加熱型高性能改質アス塗膜防水材と改質アスファルトルーフィングを組み合わせた「プライムアス工法」は、高い耐候性を保ちながら省工程を実現し、次世代の製品として展開しており、近年注目を集めている都市現代木造建築への採用も広がりを見せています。



都市現代木造建築への高耐久防水採用事例「アープル自由が丘」 設計・監理／(株)内海彩建築設計事務所

特殊な場所に対応する さまざまな機能の床材を用意

床材は、意匠性の高いものはもちろん、病院の手術室で重量物の移動に耐える「移動荷重用フロア」など、特殊な場所にも対応する製品を数多く扱っています。また、改修工事で採用されることも多いため、お客様が業務を止めずに施工できる工法も用意。今後は、豊かさや高級感、楽しさをアピールできるように、ニッチだけれどハイレベルなものにも対応しようとしています。



置敷き工法で工期の短縮も図れ、オフィスや飲食店の改修にも最適な「レイフラットタイルノーワックス」

当社の理念は「和」「革新」「技術」です。防水材、床材ともに、今後もお客様とのコミュニケーションを大切に、メーカーとして先を見据えた独自の商品の開発を進め、皆さまにご提案していきます。

TAJIMA 田島ルーフィング株式会社

<https://tajima.jp>

屋根葺き材ならびに防水材料の製造・販売、床材の製造・販売を行っています。

本社 東京都千代田区岩本町3-11-13 田島ビル

■本社内の東京ショールーム ELab [エラボ] ではさまざまな床材を体感できます。ご利用の際はHPの「ご来場予約フォーム」または電話で予約が必要です。

TEL：03-5821-7746 開館時間：10:00～17:30 休館日：土日祝日、年末年始など



東京ショールーム

目次

● 特集

4 協働のかたち ④

デザイナーとの協働

インタビュー：より良い空間は共感し合える関係から

参加者	安東陽子 岡安 泉 小林賢二	テキストスタイルデザイナー／安東陽子デザイン 照明デザイナー／岡安泉照明設計事務所 造園家／小林賢二アトリエ
聞き手	関本竜太	『Bulletin』編集長／リオタデザイン 『Bulletin』WGメンバー

● ひろば

- 12 連載：建築生産における協業を考える 第4回 変化する「設計者」と「施工者」の職域
—「設計者」のための職能団体とは— 小笠原正豊建築設計事務所／東京電機大学 小笠原正豊
- 14 interview：覗いてみました他人の流儀
大山 顕氏に聞く 肉眼でよりよく見るために写真を撮る Bulletin編集WG
- 16 海外レポート 気候変動による建築の崩壊
—アルヴァ・アアルトの建築「スリークロス教会」が救いを求めています— 彦根建築設計事務所 彦根アンドレア
- 18 神奈川地域会レポート 第5回 JIA 神奈川建築フォーラム2021
これからの学校建築を考える —多機能かつ安全でサステナブルな学校の可能性— 田邊雄之建築設計事務所 田邊雄之
- 20 未来へ継承したい風景
私が思う素晴らしい地域の風景 —渋谷区エリアの景観・歴史・環境遺産— オイカ創造所 及川洋樹
- 22 良質な建築、これからのまちづくり
建築家によるファシリテーション —カイロ旧市街、住民参加の保存まちづくり— 連健夫建築研究室 連 健夫
- 23 オンラインセミナーの舞台裏
オンラインセミナーのstep up —専用機材を使って配信しよう— 中澤建築設計事務所 中澤克秀
- 24 温故知新 連続の心地よさを求めて 寺尾三上建築事務所 寺尾信子
- 25 抱負を語る 身近な活動と共に アトリエコー級建築士事務所 小林佐絵子
抱負を語る JIAは広い世界への扉 FIVES ARCHITECTURE & INTERIOR 蔵楽友美
- 26 活動報告 交流委員会 Dグループ
人と人の繋がりが良縁を生む —交流委員会恒例の新春行事の歴史— ワイス・ワイス 立石博巳
- 27 交流委員会 Fグループ
1年半ぶりの対面イベント開催 —フジマック 東京クッキングラボラトリー見学— ヒラカワ 服部雅子
- 28 建築ウォームアップ —建築のはじまりかたを探る— 仕事を生み出す力を鍛える 田口知子建築設計事務所 田口知子
- 29 卒業設計をふりかえる
原点としての卒業設計 —都市の奥性を、建築空間へと置換する— 岡野道子建築設計事務所 岡野道子
- 30 次世代のタマゴたち
自動運転を見据えて 東京大学大学院機械工学専攻 須藤勇海
空き家改修を通じた地域の活性化活動で感じること 芝浦工業大学建築学部 川村寛樹

● あとがき

- 31 学生の会からのお知らせ 正式名称が「学生の会@joint」に決定しました！
- 31 編集後記
- 2 パートナーズアイ 田島ルーフィング株式会社 防水材、床材ともに時代の先を見据えた商品開発を続ける

表紙画像：上、「UNPLAN Kagurazaka」設計 アイダアトリエ、テキストスタイル 安東陽子 （撮影 野秋達也）
中、「LifeWork」設計 アイダアトリエ、照明 岡安 泉 （撮影 野秋達也）
下、リオタデザイン設計「KOTI」の造園風景 造園 小林賢二 （撮影 関本竜太）

2021 年度テーマ

協働のかたち 4

デザイナーとの協働

インタビュー

より良い空間は 共感し合える関係から

参加者	安東陽子	テキスタイルデザイナー／安東陽子デザイン
	岡安 泉	照明デザイナー／岡安泉照明設計事務所
	小林賢二	造園家／小林賢二アトリエ
聞き手	関本竜太	『Bulletin』編集長／リオタデザイン 『Bulletin』WG メンバー



左から、関本竜太編集長、会田友朗さん（『Bulletin』WG）、岡安 泉さん、安東陽子さん、小林賢二さん

2021 年度特集「協働のかたち」、第4回目は「デザイナーとの協働」がテーマです。かつては建築家が建築に関わるすべてのデザインを行っていましたが、今はさまざまなデザインフィールドのスペシャリストと協働し、ともに建築のデザインを高め、より魅力的でより機能的な空間を生み出しています。今回は安東陽子さん（テキスタイル）、岡安泉さん（照明）、小林賢二さん（造園）に、建築家とどのようにコラボレーションをしているのか、お話をうかがいました。

今の仕事をはじめまで

関本 まず、皆さんが今の仕事をはじめのきっかけをお話いただけますでしょうか。

安東 テキスタイル 私は武蔵野美術大学短期大学部のグラフィックデザイン科を卒業後、すぐには就職せず1年ほど染色の勉強をしたりしていました。その頃、生地を扱う会社でアルバイトとして働きはじめ、その後社員になり、はじめの数年はその会社がデパートの一角に出していたショップで販売を担当しました。限られたスペースでしたが、ディスプレイを工夫したりして、接客と同時に空間づくりを経験しました。その後、本店のショールームに移ってからは、ファッションや洋服ではなく、カーテンなどインテリアを担当する機会が増えました。当然、建築家やインテリアデザイナーと仕事することも増えて、一般のお客様のインテリアのコーディネートをしなから、建築家やインテリアデザイナーが来店するのを待

つようになりました。そこで、布を探しに来られた伊東豊雄さんや青木淳さんと出会いました。青木さんはルイ・ヴィトン表参道ビル（2002年）のホールの内装に布を使うことを考えておられ、それが青木さんとの最初の仕事になりました。

その後も約10年働き、トータルで19年勤めました。ショールームでは、最初は建築家との仕事は年に数えるほどでしたが、2000年頃から伊東さんと青木さんとの仕事がきっかけとなり少しずつ建築家と仕事をする機会が増えていき、2011年に独立しました。

岡安 照明 僕は日大の農獣医学部出身で、大学卒業後は農林水産省の外郭団体で働いていました。大学を卒業したのが1994年で、当時、ガット・ウルグアイ・ラウンドで日本の農業を強くしなくては行けないと、研究開発に国から大きな補助金が充てられていました。そのような環境の中、6年間いろいろな開発をしていたのですが、その後補助がなくなるタイミングで仕事を辞めることにしました。持っているスキルは機械製図くらいだったので、機械製図で雇ってくれる会社を探したら、就職情報誌に「照明器具メーカーを創業します」という記事を見

[安東さんの
協働事例]「みんなの森 ぎふメディアコスモス」
設計：伊東豊雄建築設計事務所「京都市京セラ美術館」
設計：青木淳・西澤徹夫設計共同体「白井屋ホテル」
設計：藤本壮介建築設計事務所

(この頁すべて撮影：阿野太一)

つけ、必要なスキルが機械製図だったので、そこで働くことになりました。それから照明器具の設計をしています。

当時、設計者が光学的な特注照明をメーカーに頼むと、だいたいメーカーから会社に話がきて、それを設計していました。いろいろなメーカーの図面枠を使って作図し、各メーカーの営業マンや技術者に渡す。そして次第に「説明しきれないから一緒に来てほしい」と言われ、いろいろな打ち合わせに行くようになりました。そうするとそのうち「あれ？あなた他のメーカーで来なかった？」と気づかれてしまい……。その頃、一緒に仕事をしていた建築家に、「独立して自分でやってみたら」と言っていたいたり、当時相談を受けていた件数もそこそこあったので、独立することを決めました。

勤めていた会社は照明器具をつくる会社で、創業してだったので要望があれば特注品をつくっていましたが、本来製造メーカーは建築家やデザイナーと組んでもものをつくるのは、リスクが高すぎてあまりやりたがりません。そのようなこともあり、僕はデザインに専念するために独立し、その会社とは今も関係性は続いています。

関本 小林さんは建築学科のご出身ですが、造園家になりたいきさつを教えてください。

小林 造園 僕は大学で建築を学び、卒業後はインテリアとプロダクトを扱う剣持デザイン研究所に通いはじめました。バブルの終わり頃で、ディスコブームやDCブランドブームなどがあり、インテリアの世界もとても賑やかでした。インテリアデザインにファインアートのような魅力も感じていました。一方で、できては消えていく一過性のデザインの儚さを感じたり、オフィスインテリアが主だった事務所の仕事を続けることに迷いもあって事務所を辞めて、半年間中東やヨーロッパを旅しました。

たまたまエジプトに友達がいたので行ってみると、そこには4000年前の石の柱が残っているわけです。それまで僕にとっての石はインテリアのサンプル帳に出てくるものでしかなかったのですが、悠久を感じさせる遺跡

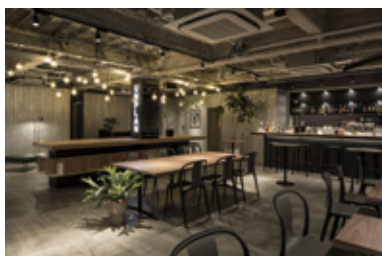
を歩いて石に対する興味が生まれました。また、イタリアに行くと中世の街並みが残っていて、石の道には轍がそのまま残っている。そういう長く残る風景にとっても魅力を感じました。帰国後は、そのような景観づくりへの興味から、今度はランドスケープの設計事務所で働きはじめました。

ランドスケープの仕事をはじめると当然植栽設計が出てきます。その事務所は国立にあったので自分も国立に引っ越し、植物のことを覚えようと、自分の家の庭をつくり始めました。それが27、28歳の頃です。事務所には3年ほど勤め、事情があつて独立しましたが、その後もその事務所の仕事を手伝いながら個人での仕事もはじめました。

僕はその頃から彫刻家としても活動しているのですが、山神をテーマにした露天風呂を数名の彫刻家がつくるという企画があり、それに参加しました。そこで僕は、露天風呂を空間彫刻のようにランドスケープ作品として捉え、初めて自分の作品に植物を計画しました。ランドスケープの仕事をしていたのでさすがに植物の名前は覚えていましたが、生態まで把握しているものは数少なかった頃です。自分が描いたプランにどんな植物を選ぼうか、植物が1年を通してどのようなストーリーを描くのかなど、本を広げながら毎日夜な夜な考えました。それがとても楽しかったのです。その時に、植物と自分の相性の良さのようなものを感じ、それから本格的に庭づくりを自分の仕事としてスタートさせました。

建築家との出会い

関本 三者三様ありながらも、共通のキーワードになっているのが人との出会いではないでしょうか。造園家としての小林さんを見出したのは、家具デザイナーの小泉誠さんだとうかがいました。



「UNPLAN Kagurazaka」 設計：アイダアトリエ



「UNPLAN Shinjuku」 設計：アイダアトリエ



「LifeWork」 設計：アイダアトリエ
(この頁すべて撮影：野秋達也)

小林 造園 小泉誠さんも国立にご自宅と事務所があり、僕のアトリエが小泉さんの通勤路にあって、庭が変わっていく様子を見てくれたのです。小泉さんは家具デザイナーと名乗っていますが、建築のプロジェクトもされていて、その頃小泉さんが千葉の方でつくっていた住宅の造園を手伝ってくれないかと声を掛けてくれました。僕はその前にも他の建築家と住宅の庭をつくっていたのですが、そういう仕事をもっとしていきたいと思っていたタイミングで小泉さんと仕事することになり、そこから住宅の庭づくりが増えていきました。ここ6、7年のことです。

関本 安東さんにとってやはり伊東豊雄さんや青木淳さんとの出会いが大きな転機だったと思われますか。

安東 テキスタイル 初めて青木さんとお話した時、青木さんはルイ・ヴィトン表参道ビルのホールについていろいろ説明してくださいました。「ホールは白い大きな空間で、トランクの中に入ったようなイメージ。トランクの中は窮屈というイメージがあるけれど、心地よく閉じた空間にしたい……」というように私に丁寧に説明してください、初めてお会いしたのに私なりにその空間を共有することができました。それから、青木さんが直接おっしゃったわけではありませんが、「建築家が考えていることを共有することがとても大事だ」というメッセージを会話の中から受け取ることもできました。

この青木さんとの仕事を通して、建築家の考えをよく理解して自分の感性を直接つなげることが、協働作業の最も大事なことで後から考えるようになりました。自分が建築家の役に立っているのではないかと思えたのもこの時が初めてで、やはり自分にとって転機と言える大きな出会いだったと思っています。ファッションとしてではない生地の可能性を感覚的に教わったのもこの時でした。

青木さんは完成したテキスタイルをととても気に入ってくださいました。この時のことをもとにして、それ以降、建築家のリクエストに応えるために自分の持っているも

のを最大限発揮しようと努めています。

青木さんとはその後もお仕事をご一緒させていただいていますが、毎回きちんと根本的なところから概念を話してくださり、自分なりに想像してテキスタイルをデザインしています。

さまざまな仕事に対応する

関本 岡安さんも照明デザイナーとして活動されておられる一方で、建築家とコラボレートすることもあると思います。どのような関わり方をされているのでしょうか。

岡安 照明 関わり方はプロジェクトによってすべて異なります。建築家が建物の大きなコンセプトを決めるタイミングで、光で何かできないかと相談されることもあれば、ほぼ完成している空間に最後に照明を入れてほしいという時もあります。その中で、自分のやっていることは幅広くて、例えば、照明器具をデザインしてつくこともあれば、光学設計をしていくこともあったり、昼光計算をしたり、コンセプトワークもあります。光にまつわることをすべてに対して、相手がそのプロジェクトで望んでいることをサポートしています。

小林さんが彫刻家の顔をお持ちのように、僕も自分のプロジェクトとして、つくりたいものを表現することがありますが、それ以外は基本的に設計者がしたいことを実現できるようにエンジニアリングサポートに徹しています。

建築家との関係性においては、特段特徴的なものがあるわけではありませんが、仕事を依頼される時に、全く実現できないようなことを言われても、当たり前ですがどうにもできません。「この空間のあの部分が少しでもこうなったらすごく面白いものになりそうなんだけど、可



「LifeWork」の照明を工場で確認

能性あるかな？」というような話だと挑戦してみたくなります。そういう話の振られ方をすると、ちょっと気分が盛り上がりますね。

関本 伝えるほうに明確なビジョンがあると共有できるのかもしれないですね。

岡安 照明 設計者が自身の理想像に対して、どの程度幅広く受け止められるかということでしょうか。僕が、今持っている技術に新しい要素を加えたら、こういう環境がつかれるかもしれないと提案した場合に、設計者が「ああそれだ！」と受け止めてくれて、さらにそれに合わせて空間を柔軟に考えていくようなことができると、ここからはどんどん展開していった、光がすごくドライブする空間をつくることができたりします。

関本 旧態依然とした元請け下請けのような関係性の中では何も生まれないけれど、対等な関係性だからこそお互いにドライブし合えるのでしょうね。そういう瞬間は興奮しますし、自分が持っているもの以上のものが生まれてくるかもしれません。小林さんは、設計者が変わると同じ植栽を扱うのでもニュアンスが変わってくると思いますが、そのあたりはどのように受け止めているのでしょうか。

小林 造園 建築家によって庭のことをどのくらい考えているかはさまざまです。建築まわりの外構全てのデザインをすることもあれば、建築家が前庭の駐車スペースまですべて計画していて、あとは植栽するだけという時もある。それはそれで喜んでやります。住宅の造園に関してはものすごく受け身です。

ランドスケープアーキテクトとして、敷地のどこに建物を配置するかということから設計できるのが理想だと思っています。ただそんな仕事の理想とは別に、とにかく庭のある暮らしを楽しんでほしい、庭のある住まいが増えてほしいという思いが強くなって、どんな条件の庭づくりも僕が役に立てそうであれば引き受けるようになりました。

それから、建築家や住まい手によって庭をつくる過程はさまざまですが、どの現場でも工事が終わった時に、「いいねえ！」と仕上がった風景に納得できるところまでやり切らないと仕事の満足は得られません。現場でのアドリブが物をいうのが造園だと思います。どんな関わり方の仕事でも、それぞれのプロジェクトに似合った最良の形を導き出せるように最後の作業まで集中して、笑顔の現場で終われるようにと心がけています。

空間にとっての最善を探す

関本 建築家もクライアントがいて、ご要望を聞いたり、状況を受け入れる立場にあり、皆さんと同じような構造があります。そのような場合、受け身と言いつつも、相手がほしいものに対して一歩先のものを提案するのが我々の仕事に求められていることのようにも感じています。建築家に提案する時に、工夫していることや心掛けていることはありますか。

安東 テキスタイル 建築家によってつくり方も考え方も異なりますし、ひとつひとつつくる空間も違うので、自分のやり方というのはあまり決めないようにしています。

提案する時は、その窓に本当にカーテンが必要なのか、カーテンによってその空間をダメにしてしまわないか、施主との対話を通じて毎回考えるようにしています。やはり、カーテンによって暮らしやすくなったり、使いやすくなったり、美しく楽しい空間になったり、そういう良い効果を生み出せるように、自分なりに工夫しています。

それから、カーテンは選択肢がとても広いのです。例えば、ここに赤いカーテンを付けたらこういう効果があるかもしれないというように、いろいろな可能性があるのです。また、設計者がつくりたい空間にベストなもの



植栽計画の楽しみを覚えた作品「木花開屋 1997年 企画設計：BANインターナショナル (撮影：フォワードストローク)」 「つむじ・i-works2015」 設計：伊礼智設計室 「西浦の家」 設計：Koizumi Studio

を考えることが大切で、ときにはメーカー品の中から選んできたり、必要に応じて特注のものをつくったりさまざまです。

建築の最後の仕上材

会田 (『Bulletin』WG) 以前安東さんと対談させていただいた時、カーテンのことを「建築の修羅場」を一手に引き受ける存在だという話になりました。機能や使用など施主の生活にいちばん近いですし、現場に入るのも工期のいちばん最後です。もしかしたら照明や造園も最後のワンフィニッシュでガラッと空間を変えるという意味では似た存在かもしれません。

安東 テキスタイル 私もカーテンは建築の最後の仕上材だと思っています。カーテンも建築の一部ですし、私は建築家チームの1人ですから、住宅など施主の顔が見える場合は建築家と施主の間に立ってうまく話しながら、最終的にはその建築に合うものに導くようにしています。

建築に関わる仕事は一般の方にとっては難しそうなイメージがあるかもしれませんが、住宅でも公共建築でも、人との関わり方など、普通の感覚がとても大事だと思っています。私は建築の勉強をしてきていませんし、大学でテキスタイルを学んだわけでもありません。現場で自分なりに学んできただけなので、いつもどこか素人なのです。だからこそ、わからないことがあれば専門家にすぐ聞いたりできるのかもしれません。

私は肩書きも「テキスタイルデザイナー・コーディネーター」としています。現場に合わせてコーディネーションしますし、デザインする必要があると思えばできる。そのあたりは緩やかに自由にやっていきたいと思っています。

関本 専門教育を受けていないから謙虚でいられる、ずっと素人でいられる。それが安東さんの仕事のスタイルに大きく作用しているように感じました。

安東 テキスタイル いろいろな設計者といろいろなプロジェクトで仕事をさせていただいているので、経験からの引き出しはありますが、それを毎回リセットして手ぶらで打ち合わせに行く、そういう感覚もあるかもしれません。

関本 それはとても難しいことだと思います。経験を積むとどうしても手癖がついたり、挑戦するというよりは無意識に間違いのない方を選んでしまいます。

安東 テキスタイル あまり話す前からこうと決めていけない、要するにカタログを持って行かないということです。もちろん最終的には自分の経験からいろいろなものを駆使してつくります。

小林 造園 私も造園に対して素人という意識がありますが、先入観というか、経験からこうすればうまくいくということがあって、毎回リセットして臨むなんて考えられません。自分の過去の事例を集めてプレゼンするというやり方をしています。

安東 テキスタイル 私の場合、建築家の皆さんが私の今までの仕事をネットで探して見て、イメージをまとめてくださることもあります。それでも、やはりいろいろな可能性を狭くしてはいけないと思っています。

関本 実績を積むと、過去の作品にイメージリソースが引っ張られていることがあり、自己模倣のようなところに陥ってしまうことはないでしょうか。

安東 テキスタイル それを建築家が望むのであれば、全然やってもいいと思っています。ただ、建物が違えば条件も違うので、全く同じパターンで同じ物というのは合わないと思うのです。ですから、もちろん希望はお聞きして、あの時はこういう状況だったからこう見えたということを説明し、同じような雰囲気を望むのであれば、「もう少し生地を厚くしましょう」とか、「パターンをもう少し



「軽井沢の家」 設計：田中敏博建築設計事務所



リオタデザイン設計「KOTI」の造園風景。現場でのアドリブも大事に、自ら施工することで責任を果たせるのも造園のいいところ（撮影：関本竜太）



現場作業用のオリジナルシャツも造園するのを楽しみながらデザイン（撮影：関本竜太）

し大きくしましよう」などと提案して、建築家が望む空間に近づけるようにします。

関本 建築家にとって、カーテンや照明、造園は自分の建築を引き上げてくれる存在だと捉えています。今のようなお話を聞くと、コラボレーションしてみたいくなります。

相手が望む空間を想像する

関本 提案する時は空間を立体的にイメージすると思いますが、誰でもできることではないでしょう。そういったことは実務経験から鍛えられたのでしょうか。

岡安 照明 そうですね。図面から自分で手描きでパースを起こす練習をして、だんだん空間を把握できるようになりました。

関本 照明には照度計算があります。日頃から数字でご自身の仕事の照度を押さえているのでしょうか。

岡安 照明 はい、どんな時でもそれが必ずありますし、仕上げる色さえ教えてくれれば、ほぼその場で照度計算をしています。

関本 ある人にとっては明るくても、ある人にとっては暗いというように、人それぞれ感覚の違いもあると思います。そのあたりはどのようにアジャストしていくのでしょうか。

岡安 照明 感覚を完全に共有するのはほぼ不可能ですので、その人の感覚を教えてもらわなくてははいけません。基準上十分な明るさでも、利用する人が明るさが足りないと感じるのなら、照度を上げていきます。それから、相手の年齢が高ければ少し明るめに設計したりもします。

また、一般的にこのくらいの照度がいいと言われる空間に対して、意図して少し明るめ、または暗めでいきたいと思いますというケースももちろんあります。

安東 テキスタイル カーテンは外と中をつなぐフィルターのような役割ですが、季節や時間帯、天候など条件によって見え方が変わります。施主にプレゼンするときにはまずそれをお伝えします。利用者がどの時間にそこに長く居るのかによってデザインしたり、1日の中でカーテンがきれいに見える時間帯があるので、そこにスポットを当ててデザインすることもあります。テキスタイルは周りの環境に影響されやすい素材ですし、それだけ周りにも影響を与えるという両方の作用があるので、それを建築家と共有して、考えていくことが大事です。

関本 カーテンの素材や色などを決めるのは、経験値からなののでしょうか。それとも直感でしょうか。

安東 テキスタイル 空間から受け取る感覚を大事にしています。もちろん設計者の要望にも柔軟に対応します。

テキスタイルは、感覚的な部分と機能の両方を満足させなくてはなりません。そして、どんなに機能を担保しても「いい遮光具合だね」と言う人はいなくて、最終的には「きれいだね」ということが評価になってしまいます。ですから、テキスタイルの機能とデザインの両立はいつも意識している重要なポイントです。

関本 小林さんは仕事のクオリティを守るために心がけていることはありますか。

小林 造園 限られた造園予算の中であまりデザイン料をプラスしたくないので、設計図を積み重ねるのに時間をかけるのではなく、最低限必要な図面だけを用意して、あとは現場で頑張るようにしています。もうひとつ、造園にCAD図は感覚的に合わないという思いが強くて、いまだに手描きの図面だけで仕事をさせてもらっています。

また、住まい手の庭との関わり方や、何を求めているのかをできるだけ察して、提案の資料を相手によってほ



建築との調和を図りながら描く、小林さんの立面スケッチ。
あっさりとしたタッチは、実際に植栽する木々の姿にも反映
されている。（「浜田山の家」設計：伊礼智設計室）

んの少しだけ変えています。例えば、1年間の植物のカレンダーのようなものを作ったり、花の写真を揃えたり、この人にはこういうものを見せた方が伝わるかなと自分なりに想像して提案するようにしています。それから、いつも提案時に立面スケッチを描いて渡すのですが、そのスケッチは実際にできあがる風景よりも木の緑量を少なくして、なるべくあっさり描くようにしています。

関本 普通提案する時は、より見栄え良く描くものではないでしょうか。

小林 造園 昔はもっと描き込んでいたのですが、住宅の庭を提案する際に建築を消さない程良いタッチが身についてきたのかもしれません。プランとスケッチは造園イメージと見積りの根拠だけを伝えて、完成した時にスケッチ以上の実際の石や植物の力を実感してもらいたいのです。

それから、お2人の話を聞いて、造園にはあまり機能がないと感じました。もちろん、遮蔽したり、歩くことを誘導することはありますが、それはどうしても必要な機能ではない場合が多いです。機能のない自由さが造園の魅力の1つかもしれません。僕もカーテンや照明と同じように最後に現場に入りますが、修羅場というような雰囲気は全くありませんし、僕はただ現場を楽しんでいただけです。造園の工事をすると、建物の雰囲気がガラッと魅力的に変わりますし、本当にやりがいのある仕事だと思っています。

早い段階からの協働でより良い空間を

関本 最後に建築家と協働するうえで、建築家に望むことなどあればお聞かせください。

岡安 照明 人工光に対して興味がない人が多いのが少し残念です。照明によって、当初案から空間が劇的に変化していることもあると思っていますので。

人工光をうまく操ればこれまで見たことのないような建築空間ができる、というような期待を建築家自身が抱いてくれたら、協働もより面白くなるのではないのでしょうか。僕はどうせつくるなら今までにないものをつくるべきだと思っています。建築家も建物ごとにクライアントや与件が違うわけですから、それがうまく噛み合った時に何か今までにないものをつくれるチャンスが起きる可能性はあると思うのです。

関本 協働する場合は、どのタイミングで相談するのがよいでしょうか。

岡安 照明 まだ具体的なプランがない時に、つくりたい空間と光のイメージを一緒に話していくのもいいでしょう。それが本当の意味でのコラボレートかもしれません。

それから、照明は最先端のものが民生化されて使えるようになったり、まもなく民生化されるであろうものなど、技術の進歩・変化が速いです。使用する器具によって実現できる空間が決まってくる可能性もありますから、最新の情報を知るのも大切なことではないでしょうか。せっかくだから僕の知識や経験を建築に生かしていたきたいです。

安東 テキスタイル 全部お任せされたり、好きなようにつくっていいと言われることもあります。もちろんできますが、私としては建築家との協働に喜びを感じています。もともと生地は作り方からして規制があります。パターンのリピートでないといけませんし、機^{はた}の大きさも限られている。でもそういうものを乗り越えてつくるのが面白いのです。建築における協働でも条件があればあるほど逆に新しいチャンスが生まれて面白いので、建築家には自分の持っているイメージをこちらに伝えていただきたいです。そうするとお互いに共鳴して新しいものが生まれたり、そこにふさわしい美しいものができる可能性

参加者プロフィール



安東 陽子 (あんどう ようこ)

テキスタイルデザイナー・コーディネーター
株式会社安東陽子デザイン代表

東京生まれ。武蔵野美術大学短期大学部卒業後、テキスタイルデザイン会社で勤務。2011年「安東陽子デザイン」設立。数多くの建築家とのコラボレーションで、さまざまな空間にテキスタイルを提供している。



岡安 泉 (おかやす いずみ)

照明デザイナー
岡安泉照明設計事務所

1972年神奈川県生まれ。1994年日本大学農獣医学部卒業。生物系特定産業技術研究推進機構を経て、2000年より2007年まで照明器具メーカーに勤務し、2005年 ismi design office 設立。建築空間・商業空間の照明計画、照明器具のデザイン、アートインスタレーションなど光にまつわるデザインを国内外問わず行っている。



小林 賢二 (こばやし けんじ)

造園家
小林賢二アトリエ

明治大学、桑沢デザイン研究所で建築・デザインを学び、剣持デザイン研究所、苑環境計画を経て、1993年より小林賢二アトリエ主宰。土・石・水・草木を主な素材にした造園・造形・アートワークの制作を行っている。

が高まります。

私の仕事は決して「好きな絵を飾ってください」と言われるようなものではなく、最終的に使う人にとって良い空間になるように、建築家とさまざまなことを共有しながらつくっていくことです。お互いに自分の仕事に責任を持ち、その一方で空間のために協力し合える関係性ができれば本当にいいものができると思っています。

小林 造園 もし造園家と仕事をしたことがない人がいたら、ぜひ1度経験してほしいと思います。何か違いを感じていただけるのではないのでしょうか。植物が立ち上がることによって生まれる光がありますし、それは建物にも影響するでしょう。庭に魅力を感じ、大切にしてくれる建築家が増えることを望んでいます。

それから、なるべく土を残してほしいというのが僕の願いです。少しでもむき出しの土があれば、植物が育つことができ、何かしら暮らしに面白い物語を増やすことができます。自分の小さな庭づくりから学び始めた僕の体験から、とにかく土さえあればという発想が基本にあります。本当はプロジェクトの最初から関わり、庭も含めて一緒に建物の話ができればいいのですが、それに限らずに、リノベーションの仕事でも喜んでもらっていますし、とにかく土を残してください。敷地全体が舗装された住宅が連なる街と、庭がある住宅が連なる街では全く風景が異なりますし、気温も変わってきます。家と庭が連なって街並みができて、毎日目にする風景が生まれている。その意識をいつも共有して協働できたらいいですね。

関本 三者三様の面白い興味深いお話ばかりでした。
本日は貴重なお話をありがとうございました。

インタビュー：2021年12月7日 LifeWork Cafeにて

インタビューをふりかえって

デザイナーとひと括りにしてもその定義は幅広く、ある意味建築家もまたその一部とも言えます。そんな我々と守備範囲は異なれど、それぞれの立場でクリエイティブに建築の価値を生み出す、我々にとっては「相棒」ともいうべき方々に今回は集まっていたきました。

安東陽子さん、岡安泉さん、小林賢二さんは、それぞれテキスタイル、照明、造園とフィールドは異なりますが、そこには不思議な共通点がありました。それはそれぞれ大学では現在とはまったく異なる専攻を学び、また職種に就かれていたということ。それぞれの転機から現在のお仕事に辿り着いたようですが、そのターニングポイントにはメンターともいうべき建築家との出会いもあったようです。そのためか、お三方の仕事への向き合い方や発想には固定観念がありません。安東陽子さんはそれを「普通感覚」「毎回リセットして臨む」といった言葉で語ってくださいました。

一方で建築家との協働においては、空間に関わる重要な決断を丸投げされたり、現実性に乏しい要望を出す相手との仕事はうまくいかないとも。またなるべく早い段階から(時にプランすらも立ち上がる前から)関わりたいとおっしゃっていたことも印象的でした。

これは我々がクライアントに願う気持ちとも同じかもしれません。要は相手に対するリスペクトの問題なのだと思います。お互い忌憚なく語り合うことで、我々建築家だけでは浮かばなかったような発想が生まれ、より魅力的で独創的な空間へと昇華する。それこそが我々にとって、デザイナーとの協働における最大の醍醐味と言えます。

(『Bulletin』編集長 関本竜太)

変化する「設計者」と「施工者」の職域

—「設計者」のための職能団体とは—



小笠原正豊

設計と施工の境界について

過去3回の連載では、米国との比較によって「設計業務における協業／分業」について光を当てました。設計は、1人の「設計者」によってのみ行われる行為ではなく、複数の人が関与する協業によって行われること、さらに、いわゆる「設計者」によってのみ行われる行為ではなく、一般的には「施工者」と呼ばれる人々によっても設計が行われていることを指摘しました。

西洋において、近世までは石工や大工の親方(マスタービルダー)が設計し施工をまとめていくのが一般的でした。ルネサンス期の15世紀になると、設計と施工の分離が試行され、設計を専業とする建築家(アーキテクト)の概念が確立したものの、職能として確立するには至りませんでした。理学・工学の知識体系が整備され、科学・技術の進歩を背景とした土木工事が行われる18世紀以降になると、エンジニアリングに関する専門職が確立するようになりますが、医学や法学のように、学問的な知識体系に基づいた独立した職能の1つとはみなされておらず、仕事さえあれば誰でも“建築家”として活動できました。やがて、19世紀中頃になり、職能団体や建築教育機関が整備されるようになってようやく建築家としての職能が確立されることとなりますが、長い建築の歴史から考えると、かなり新しい職能であると言えるでしょう。

専業か兼業か？

JIAにとって設計者の専業・兼業問題は、会の存在意義に関わる重要な問題です。我が国においても、明治時代以前の建築生産では、大工棟梁が設計と施工の両方を担うことが一般的でした。明治時代以降、意匠・工法・材料のあらゆる面で、従来の日本の建築生産とは異なる洋風建築技術が導入されるとともに、設計と施工の業務分離が芽生え始め、大正3(1914)年、全国建築士会(現在のJIA)が設立され、設計を専業とする職能の確立を目指すようになりました。^(注1)

一方で、少なくとも英米の職能団体では大きな変革が起こっています。もともと、欧米で確立した建築家の職

能団体では、設計業務の独立性を担保するために、建築家が建設業者に雇用されることを禁止した「倫理綱領における被雇用禁止条項」がありました。しかしながら、1970年代半ばから英米では、反トラスト法違反の観点から公正取引委員会による勧告を受けるようになり、80年代に入ると、AIA(米国建築家協会)でもRIBA(王立英国建築家協会)でも被雇用禁止条項は廃止されました。^(注2)つまりAIAもRIBAも会員が兼業であることを否定してはいないのです。建築家や建築士の役割や責任範囲は恒久的なものではなく、社会のニーズと共に変化していることを忘れてはいけません。

工業化・BIM化による職域の変化

我が国では、戦後、キッチンやバストイレといった水回りや建具などの部位部材に対して工業化が著しく進みました。一部の特殊なプロジェクトを除き、大多数の「設計」という行為が、ゼロから建材を設計・加工するのではなく、市場の商品を適切に組み合わせることへと変化しました。より快適で省エネ性能の高い建築物が社会全般のニーズとして望まれている中で、各メーカー間で切磋琢磨してつくる建具や水廻りに代表される工場生産品の方が、いわゆる「設計者」が設計・発注する特注製作物よりもはるかに高い性能を担保します。この点では実は「設計者」の組み合わせによる設計よりも、従来「施工者」として区分される「工場生産品の設計者」による設計の方が、建築物の総合的な価値を向上させる点で影響力が大きいかもしれません。プロジェクト全体をマネジメントする「設計者」の存在は今後も残ると思われます。一方で、将来的な「施工者」の減少は、さらなる工業化を進行させるとともに、従来型の職域における「設計者」が設計する余地をさらに減少させていく可能性が高いでしょう。

さらにわが国におけるBIMの採用拡大は、「設計者」の職能・職域を大きく変革させる可能性があります。従来の設計手法では、計画・意匠による設計案に対して、構造・設備による検討が繰り返され、設計案がある程度固定されると環境・積算・施工などの検討がなされます。一方、

BIMを活用した設計プロセスでは、3Dモデルの作成と並行して、構造・設備設計および環境・積算・施工などの検討を前倒しで行うフロントローディングが進むと言われています。プロジェクトの初期段階で不確実性を下げておくことにより、実施設計や施工段階における予算超過や、工期延長による事業費の増加を抑えることが可能になりますが、BIMを活用した設計プロセスの採用は、従来想定されてきた設計と施工の壁を低くし、「設計者」と「施工者」の協働がさらに進む可能性があります。この場合、「施工者」が設計を担うばかりではありません。従来「設計者」とされた人が施工の領域にリスクを持って踏み込み職域を拡大する実例があることも留意すべきです。

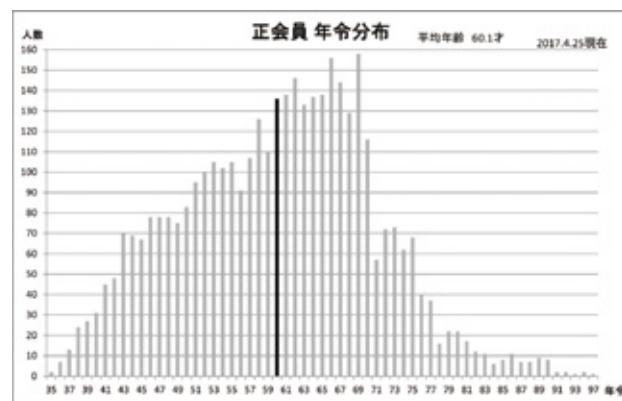
このように、海外では従来JIAが理想としてきた職能団体のありかたが大きく変化してきました。国内では戦後の工業化やBIM化とともに、設計のありかたが変化しつつあります。

縮小の時代への意識改革

国土交通省の資料によると、一級建築士事務所に所属している所属建築士数は50代以上が60%を占め、20代30代が圧倒的に少ない結果となっています^(注3)。さらにJIA近未来研究特別委員会最終報告書によると、2017年4月時点でJIA正会員の平均年齢は60.1歳であり、会員数は4,000名を割り込んでいることから、はるかに偏った状況となっています。5年前でこの状況ですので、2022年現在では、より高齢化は深刻な状況となっているでしょう。ちなみに医師の平均年齢は48.1歳^(注5)、弁護士では30代が最も多いとされています^(注6)。建築設計の職能・職域が変化し、建築士自体が高齢化しつつある時代に、JIAはどのような組織になっていくべきなのでしょう。

一歩引いて我が国全体を俯瞰してみましょう。1999年から2010年にかけて実施された「平成の大合併」において、全国の市町村は人口減少と高齢化への対応策の1つとして合併を選択しました。市町村数は3,232(1999.3.31)から1,730(2010.3.31)へと減少し、行政基盤の強化とともに効率化や歳出抑制が進められました^(注8)。その成果に関する評価はさまざまでしょうし、国の自治体合併の進め方についても根強い批判はあるものの、少なくともわが国の現在および将来に向けた効率化と歳出抑制の点からは一定の成果はあったと言えます。

JIAの正会員の中には、建築士会や建築士事務所協会にも所属している方は多いと思われます。各会は会員増強のため、会員交流・市民参加ワークショップ開催・会誌発行など似たような活動を行っていますが、複数の会が同時並行で行うことにどのようなメリットがあるので



JIA正会員年齢分布 (注7)

でしょうか。職能団体が持続可能であるためには、次世代を担う若手の参加が必須となりますが、各会ばらばらに年会費を支払いつつこれらの活動に参加することに意義を感じる人は少ないでしょう。我が国の経済活動が縮小していく中で、「平成の大合併」と同様の効率化や歳出抑制を行い、建築設計分野の職能団体として基盤強化を模索する必要はないのでしょうか？

国ごとに社会のシステムが異なるためかなり大雑把な議論となりますが、少なくとも英米では、建築家協会、建築士会、建築士事務所協会のように組織自体が細分化されておらず、AIAやRIBAに一本化された中で地域や興味の対象や専門性に応じた、チャプターごとの活動が行われています。JIAにおいては、各会による現行の連携以上の抜本的な吸収合併、または「建築家交流サロン」として活動をゆるやかに限定・縮小していくことが、設計分野に着目した建築生産における協業の行く先なのではないかという筆者の考えを提示して、4回の連載を終えることにします。

〈注〉

- 1: 1年後に日本建築士会に改名
- 2: 西野佐弥香「英米の専業兼業問題における被雇用禁止条項の削除からみた建築家の職能に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』73、633、2461-2466、2008
- 3: 国土交通省HPより<https://www.mlit.go.jp/common/001205303.pdf>
- 4: 2018年3月から2019年5月まで活動・研究を行った近未来研究特別委員会の最終報告書より
- 5: 厚生労働省HPより<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/ishi/06/kekka1-2-2.html>
- 6: 日弁連HPより<https://www.nichibenren.or.jp/library/pdf/document/statistics/2021/1-1-1.pdf>
- 7: 近未来研究特別委員会(準備委員会)2017年8月 参考資料編より
- 8: 総務省、「『平成の合併』について」の公表、平成22年3月5日

大山 顕 氏に聞く

肉眼でよりよく見るために 写真を撮る



今回お話をうかがったのは、写真家でライターの大山顕さん。「団地マニア」であり、『工場萌え』（東京書籍、2007年）の著者としても知られ、20年以上にわたって工場、団地、ジャンクションなどの建造物を撮影されています。2020年に出版された著作『新写真論』（ゲンロン叢書）では、スマホ社会ゆえの写真の在り方を示し、新しい写真論を展開。大山さんに写真と風景、建築について、そして写真とは何なのか、今考えておられることをお聞きしました。

——写真を撮り始めたきっかけをお聞かせください。

僕は千葉大の工業意匠学科出身で、都市デザインが専門の柘植喜治先生のもとで学びました。プランニングというよりマスタープランのつくり方を教わり、商業施設をつくる課題ではフィールドワークも行いました。地形図を見ながら現場周辺を歩き、現地の人に話を聞く。その後、フィールドワークで得た情報をもとに自分のプランニングを発表するのですが、その時間が面白くて好きでした。

当時、あちこちで工業地域が衰退し、その跡地に商業施設が建っていました。卒業制作では、壊されることが決まっていた川崎製鉄（現 JFE）の工場跡地を敷地に選び、その建造物をなるべく活かして転用することを提案しました。当時は工場を残すという考えに驚かれましたが、現地で見る工場はとても格好良かったので、発表の時はその格好良さを伝えるために写真を使って説明しました。それがきっかけで工場の写真を撮るようになり、修士でも同じことをテーマに、社会調査をしたり事例を集めて、工場の転用を正当化する論文を書きました。

卒業後は松下電器（現 Panasonic）のシンクタンク部門で働いていましたが、趣味で工場や団地の写真を撮り続けていました。ちょうどその頃、1996年頃ですが、インターネットが普及しはじめ、電子掲示板で工場や団地が面白いと思っている仲間撮ってきた写真を見せてやり取りするようになりました。次第にそれがネットの世界で知られるようになり、それに気づいた若手編集者が声を掛けてくれて、2007年に『工場萌え』という格好良い工場を紹介するガイドブックを出版しました。それがすごく売れて、それ以降テレビ番組の出演などいろいろなお話をいただくようになり、仕事との両立が難しくなったので会社を辞めてフリーになりました。

写真や出版を取り巻く環境がちょうど変わる時でしたし、運が良かったと思っています。

——工場や団地、ジャンクションなど大きな建造物を撮られています。その魅力を教えてください。

土木建造物に惹かれるのは、地形や日射、地震など、

人間がどうにもできないものを引き受けた形でつくられているからです。それは用の美や機能美ではなく制約美なのだと思います。そういうものが好きで撮っています。

転用も同じで、敷地や法律、費用、スケジュール、地元住民などさまざまな制約があります。学生の時はいくらを邪魔なものと思っていたのですが、そういう制約も味方に付ければクリエイティビティーにとって非常に有用なものになることがわかってきました。例えば、日本橋川の上の首都高は景観を台無しにしていますが、日本橋川も当時の首都高で、日本橋を起点とした街道も首都高、そして昭和に今の首都高ができて、各時代の首都高がレイヤーになって重なっているのです。都市がどういうものなのかが表れている非常に貴重なものと言えるのではないのでしょうか。今の首都高を通すことができたのは、かつての首都高である水運があり、制約をうまく味方につけた結果だと思います。

——今はスマホで誰でも写真を撮ることができます。

以前は写真を撮るのも見せるのもお金と時間が掛かり、カメラもプロダクトとして未熟だったので扱うのが難しく、使えるだけで写真家のふりができました。また、家庭では写真はお父さんの趣味であることが多く、お母さんや子どもは写るだけで触らせてはもらえなかった。それが今スマホの時代になり、撮って5秒後にはSNSにアップできるようになりました。きっとスマホが初めての自分だけのカメラという方も多いでしょう。カメラは民主化され、ようやくまともなものになったのです。

僕は今はデジタル一眼レフを使っていますが、大判カメラで撮っていたこともあるので1日に数枚しか撮れない面白さも知っていますが、やはり今のスマホの形態がカメラとしていちばん健全だと思っています。ただし、僕自身はスナップを好んで撮るタイプではありません。僕の理論とやっていることはあまり一致していません。

——SNSによって写真の展開の方法も変わりましたね。

僕は「現像」という言葉を再解釈しようと思っています

す。以前は撮影→現像→プリントというプロセスがあり、それぞれ別のテクニックと時間がかかっていました。しかし今はデジタル写真がネットでやり取りされ、これらがすべて一体となって行われています。撮影は現像の一部で、SNSにアップしてリツイートやLikeをもらうのも写真を見た人による現像と言えます。要するに、この写真はなんであるかということを確認していく、その行為を現像と呼ぶのであれば、今やフォロワーによる評価は写真における現像の大部分を占めています。写真家はそれがどういうことであるかを学ばなくてはならないし、訓練しなくてはならないと感じています。

人間はカメラのように固まって見るのではなく、目や体を動かしながら見て、それを頭の中で合成しています。僕はそれと同じことを写真で表現したいと思い、写真を繋いだり合成したりしますが、それも今の時代の現像だと思っています。

——風景と写真の関係はどのように考えておられますか。

僕らの目はカメラとは違いますし、頭に思い浮かぶ絵は透視図法ではありませんが、風景を説明する時はいまだに竣工予想図やパースなど、カメラアイでビジュアライゼーションされたものが用いられています。

本来僕らは風景を言葉で受け止めるべきだと思うのです。建築でも優れた設計コンペでは言葉に感動したりしますよね。言葉は建築でも都市でも風景でも重要なものなのです。しかし、都市や建築の批評が盛んだった80年代と比べると、今はそれほどではありません。皆さん言葉によって建築や都市を風景として立ち上がらせることにあまり興味がないのでしょうか。僕は写真家ですがそこにとても興味があります。写真を撮っているからこそ、建築における言葉の重要性に気がつきましてし、それはスマホが普及したから気づいたことです。

——写真の変化は建築にも影響があるのでしょうか。

スマホで誰でも写真が撮れるようになったのはいいのですが、問題はみんなの写真体験がスマホの小さな画面でなされていることです。昔から建築は、現地に行ったことはなくても雑誌の写真を通して知ることが多いでしょう。せめて雑誌のサイズで見ればいいのですが、小さい画面では空間全体は表現できず、断片化されたグラフィックやテクスチャーの一部ばかりがSNS上で“映えるデザイン”として注目されるでしょう。これはファサードのデザインなどに大きく影響を及ぼす気がしますし、このままでは建築が小さくなってしまふ。都市と建築は最終的にはスケールの問題なので、それが画面上ばかりで展開されるのは良くないことだと思うのです。



各時代のインフラが地層のように重なる日本橋。日本橋川が通されたのは15世紀、街道整備が1603年（今の橋は19代目1911年築）、首都高ができたのが1963年。さらにこの地下には銀座線が通る。

——現在はどのように仕事をされているのでしょうか。また、今後のことについてもお聞かせください。

写真を撮って、それを各種SNSで発信していますが、今は論じる方にも力を入れています。僕が工場は素敵だと発信した当時は、公害などの歴史はいったん置いておいて、見た目が素敵だという言い方をしました。そのやり方に後悔はしていませんし、それがあつたから工場が注目されるようになり、写真を撮る人が増えました。しかし、今工場の写真を撮る人は夜景を撮るのです。僕は夜景がいいとは一言も言っていない。工場が面白いことを説明するために写真を使いましたが、今では「工場を撮ると“映える”」となつてしまい、僕がやりたかったことと違うかたちで定着してしまいました。これに対して改めて工場はなぜ素敵なのかというのをきちんと語りたいと思っています。

——最後に改めて写真の魅力を教えてください。

僕はよりよく見るために写真を使っています。写真によって建築がより理解できたり、肉眼ではわからなかったことに気付くことがありますよね。目だとスルーしてしまうものをスルーさせないようにする装置として、カメラは非常に優れています。だから僕にとって良い写真というのは、写真自体が良いかではなくて、より肉眼でしっかり見ることができる写真が良い写真だと思っています。

——貴重なお話をいただきありがとうございました。

インタビュー：2021年12月10日 LifeWork Cafeにて
聞き手：会田友朗・関本竜太・望月厚司（『Bulletin』編集WG）

PROFILE

大山 顕（おおやま けん）

写真家／ライター 1972年生まれ。主な著書に『新写真論』（ゲンロン）、『工場萌え』（石井哲との共著、東京書籍）、『立体交差』（本の雑誌社）、『団地の見究』（東京書籍）など。Twitter:@sohsai

気候変動による建築の崩壊

—アルヴァ・アアルトの建築「スリークロス教会」が
救いを求めています—



彦根アンドレア

まず、フィンランドの建築中心の文化誌である『ark』に掲載された文章を紹介します。



スリークロス教会の状態

フィンランド東部イマトラ市のヴオクセンニスカにあるアルヴァ・アアルトの「スリークロス教会」は、フィンランドを代表する現代建築のひとつです。1958年に完成したこの建物は、湿気を原因とするダメージを継続的に受けており、2019年の秋にはついに閉鎖に追い込まれ、緊急かつ大規模な修理が必要とされています。

教会の周囲を歩くと、白い漆喰仕上げのレンガのファサードと緑青の銅板の屋根が、自由で柔らかなアーチ状の形と直線を交互に織り成しています。

しかし、そのモダンなフォルムの背後には、塔、聖堂、聖具室があるように伝統的な教会の要素が見て取れますし、旧来の教会ならポーチがある場所は玄関ロビーが配されています。アアルトの直感的で革新的な教会建築は、社会的な側面も持っているのです。

アアルトは、この町の工場コミュニティのための多目的教会を設計する際に、個人の幸福と地域コミュニティの幸福のどちらをも追求しています。

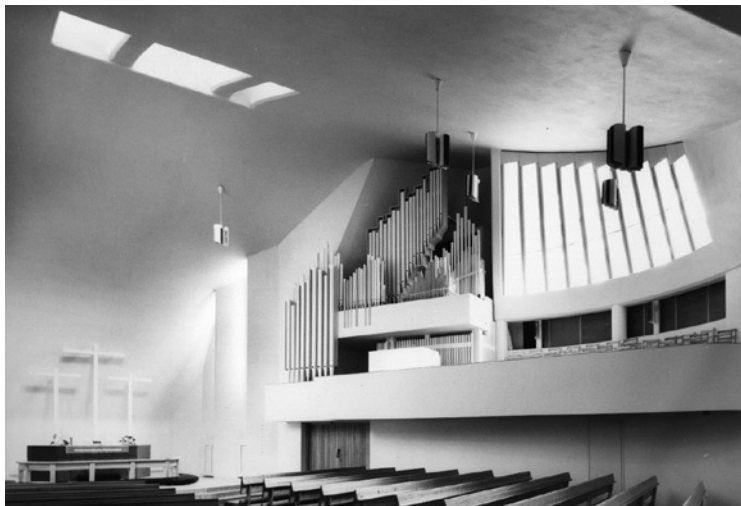
教会と牧師館の建築は、1969年にはイマトラ市の都市計画により、また2003年には教会法によって公的な保護対象に指定されました。1993年には、近代建築の保護と

記録を専門とする(国際)団体「ドコモモ」が、フィンランドの重要建築文化財のひとつに選定し、2021年には「スリークロス教会」は13のアアルト作品群のひとつとして、ユネスコ世界遺産登録ノミネートのリストに入りました。

運命に翻弄される稀有な教会

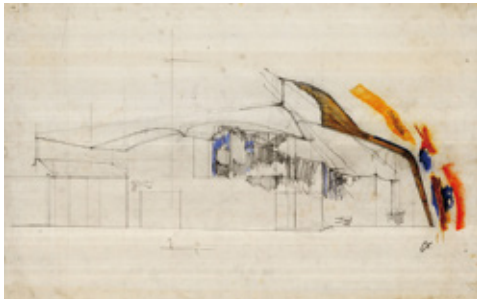
スリークロス教会の第一次改修工事は2007年に完了しましたが、建物を悩ませていた湿気の問題は、表面構造の更新だけでは改善されませんでした。問題が続いたため、西側の地下室は閉鎖を余儀なくされ、建物の管理者であるイマトラ教区はムストネン・アーキテクツに対策を相談しました。状況は精査され、すでに10年近く前から全体的な改修工事の実施が待たれている状態です。2013年には改修のプロジェクト計画が完成し、2014年に建物物件歴史報告書ができています。

2016年に完了した最初の追加修理工事では、西側地下室の深刻な湿気問題に対処しました。教会の西側と南側の階段と入口レベルの修理と防水、庭の排水の改善が行われたほか、庭の地形(コンター)をより当初計画に近い状況に還元しています。また、基礎台座の横の土を透水性の良いものに変更しました。同時に身廊(礼拝堂の中央部分)上部の屋根の換気を暫定的に改善させ、また屋根や庇の補修、庭の照明の修復方法を選定するための試験補修も実施しました。修理された地下構造物は、今のところ適度な湿度の状態を保っています。しかしな



スリークロス教会完成直後の写真(出典: アルヴァ・アアルト財団)

礼拝堂とパイプオルガン(出典: アルヴァ・アアルト財団)



アアルトの描いたスケッチ (出典: アルヴァ・アアルト財団)



外壁の損傷がはっきりわかる (撮影: Niina Svartström)



2017年フィンランドの旅で撮影した教会
(撮影: 彦根アンドレア)

がら2017年以降、補修作業は資金不足により中断されています。

2020年秋に身廊で行われた室内空気環境測定では、新たに身廊の祭壇側の端で構造物の湿気による損傷が指摘され、さらに(カビなどによる)健康被害発生リスクが指摘されたため、ついに教会は当面の間閉鎖されることになってしまいました。現在教会の礼拝は行うことができず、身廊で行われていた高齢者のための健康維持教室などの団体活動も別の場所に移されました。

国外からの資金調達を模索

教会堂の運命は、その地域社会と結びついているようです。大見出しで何度も繰り返し助けを求める告知が出て、老朽化した「スリークロス教会」の修理を支援するような目立った市民運動が地元で起こることはありませんでした。ヴォクセンニスカ地区自体が市内でも住民流出が起きている地域で、その人口は10年間で10%減少しています。

フィンランド政府は2016年以降、福音ルーテル教会に対し、文化的・歴史的に価値のある建造物の維持管理を目的とした資金を提供しています。法律によれば、この教会補助金は保護対象になっている教会の改修プロジェクトに資金を提供することに主眼が置かれているはずですが。しかし残念ながら、2021年の合計約700万ユーロの補助金は58もの個別のプロジェクトに分配されてしまいました。

2016年、スリークロス教会には、改修の第一段階の実施のために20万ユーロの改修補助金が交付されました。しかし、それ以降毎年、教会委員会は同教会への助成を却下しています。その理由は、スリークロス教会が所属するイマトラ教区の経済状況が良すぎるとみなされていることに由来します。補助金の支給額は、教区ごと、教会税率、税収、教会・礼拝堂の総数によって決定されています。このように教会委員会の補助金決定は、法律の趣旨に反して、文化史的な根拠よりも経済的な根拠に基づいて行われてきました。また、教会委員会が、文化史的価値を考慮して助成決定するのに必要な専門性を有する組織であるのかという疑問もあります。

教会建築の状態が憂慮すべきものであるにもかかわらず、教区は修理に必要な150万ユーロの資金を持ち合わせていないのですから、この状況は問題と言えます。フィンランド政府、EU、アメリカのゲッティ財団への資金援助申請も、今のところ失敗に終わってしまいました。このプロジェクトには遠く日本からのものも含めパートナーやクラウドファンディングが募集されていますが、今のところ着地点は見つかっておらず、衰退しつつある教区にとっても維持・修繕の負担を自分たちの肩だけに担わせるのは、不公平だと見られているのです。

(建築家 Niina Svartström)



上記文章の執筆者はムストネン・アーキテクト所属で教会の修繕担当の建築家 Niina Svartström さん、翻訳はフィンランド在住、デザイナー兼翻訳者の遠藤悦郎さんです。

2017年フィンランドの旅で、スリークロス教会を訪れたことをきっかけに彼らに会い、上記の問題の原因を知りました。気候変動により本来のフィンランドの乾燥した氷点下の続く冬から、雨が多く多湿になり、0度を超える日が増えたことで氷の溶解が繰り返され、壁が建設時想定していた以上に湿気の影響を受けたことが原因です。この現状を知り「なんとかならないか」と、多くの方、アアルト財団や、若者を中心とした団体の UNDER 30 と共に、THREE CROSS HELP という活動を始めました。この活動内容は「スリークロスヘルプ」と検索していただくと、さらに詳しくご覧いただけます。

上記の文章に補助金がなかなか下りない現状が述べられていますが、昨年末にフィンランドの福音ルーテル教会から、補助金をいただくことができました。しかし、修繕金はまだまだ足りておらず、本格的な修繕は始めることができません。

最近、これからの環境建築、カーボンニュートラルやSDGsについてよく話題に上がりますが、この教会の現状を見て、気候変動はすでにそこに存在している大切な建築にも大きな影響を与えていることを実感しています。私たち建築家のいろいろな仕事の中には、守らなければいけない建築を守ることも使命であると思います。

第5回 JIA 神奈川建築フォーラム 2021

これからの学校建築を考える

—多機能かつ安全でサステナブルな学校の可能性—

開催日：2021年10月31日（日）

会場：横浜 象の鼻テラス（オンライン同時開催）



神奈川地域会
田邊雄之

昨年10月31日、横浜の象の鼻テラスおよびオンライン配信にて、主催／JIA神奈川、共催／横浜市建築局による第5回JIA神奈川建築フォーラム2021「これからの学校建築を考える～多機能かつ安全でサステナブルな学校の可能性」と題したシンポジウムおよびデザインレビューが2部制で開催された。今回のフォーラムに際してJIA神奈川代表の小泉雅生氏より、以下のような開催意図が示された（一部抜粋）。

「社会状況をふまえ、これからの教育環境はどのようなべきか、最新の知見を持つ専門家とともに、考えてみたいと思います。同時に、身近な公共建築である学校建築への理解・関心を深めるべく、設計者が市民に向けて設計意図を説明するデザインレビューも開催します。このような取り組みを通じて、広く地域に愛される公共建築の実現に結びつけられればと思います」。

第1部 シンポジウム

第1部のシンポジウムでは「これからの学校」をテーマとし、教育関係の専門家、若手で気鋭の学校建築計画研究者とともに、学校建築が抱える課題とこれからのあり方について深く掘り下げられた。パネリストは伊藤俊介氏（東京電機大学教授）、高橋純氏（東京学芸大学教育学部准教授）、垣野義典氏（東京理科大学理工学部建築学科准教授）で、司会・モデレーターは小泉雅生氏が務めた。まずはパネリスト各氏からのレクチャーから始まり、その後意見交換が行われた。

伊藤氏は環境心理学の観点から教育施設をはじめとする各種建築の研究を行っている。デンマークへの留学経験もあり定点観測もなされている。レクチャーのテ

マとして「1.少子化・ICT・コロナ、2.ユーザーと設計者の関係、3.学校建築の役割」があげられた。そして「学校で学ぶのが良いという前提だが、ICTを利用した分散型も十分にあり得る」という氏のスタンスも述べられた。内容については、学校がなくなることで地域活力が低下し、結果としてコミュニティの存続に関わる点や、個別最適な学びの追求とICT導入によって小規模校のデメリットとされる点が問題でなくなることなどが語られ、これまでの「学校整備」から「学習環境の提供」への視点を転換すべきではとの提言がなされた。

またデンマークの事例から既存校舎の可能性が提示された。ICTにより物理的に分かれていてもオンライン上で「いっしょに」いる空間をつくることができる。学校の空間が変わるのを待たなくても教育ツールで変えられる可能性がある。教育を変えるのは、やはり教育なのだ。そして建築は教育を変える力になるとの言葉も加えられた。

高橋氏は教育工学、教育の情報化に関する研究に従事。「学習指導・GIGAスクール構想について」をテーマとしてのレクチャー。その中でもGIGAスクールの事例紹介には驚かされた。すでにデジタルツールを活用できている学校では、児童がグーグルクラスルームなどを用いて今日やることを生活班で共有し評価し合い、学習到達状況を評価するループブリックを話し合うチャットの存在や、共同編集＋コメントで交流がなされていた。まさに大人顔負けの作業風景がそこには広がっていた。GIGAスクール構想は「環境の影響を受けて→まず児童が変わる→先生が変わる」という順で変化が起これること。

垣野氏のテーマは「未来の学校建築のつくりかた―日



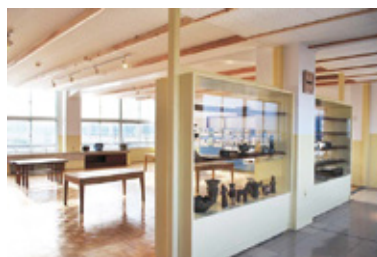
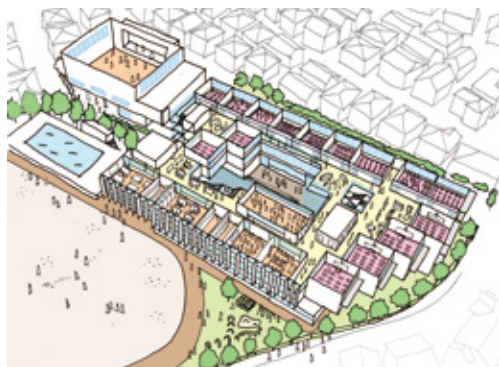
第1部シンポジウムの様子

撮影：山下祐平



第2部デザインレビューの様子

撮影：山下祐平



小田原市立酒匂小学校内装木質化改修
(設計：加茂紀和子／みかんぐみ)



横浜市立都岡小学校の模型写真(設計：八板晋太郎
／八板建築設計事務所)

横浜市立上菅田笹の丘小学校のメインパース(設計：柳澤潤／コンテンポラリーズ)

本、オランダ、フィンランド、スウェーデンの学校を横断して」。フィンランドは2010年から「Finnish Schools on the Move—動く学校」をスローガンに、とにかく物理的に動くスタイルを取り入れているとのこと。45分間の授業内で児童を「休ませない」仕組みとしていくつもの課題があり、途切れない流れとなっている。また教室にはソファやラグがあり児童が自由に動き、寛ぎながら授業を行っているのも印象的であった。オランダの例では教室内のプランニングが紹介された。6つほどのコーナーが窓際や入隅を上手に使いながら教室内に散りばめられており、安定させる場所、集中力を高める場所などキャラクターの異なる空間が特徴的であった。

3名によるレクチャー後、会場も交えて質疑がなされた。「教室の今後、理想の教室とは？(日本の社会全体に通底する事柄も踏まえて)」との問いに対して、高橋氏の以下のような回答に共感を覚えた。OECDの報告書によると、欧米では、生まれながらに資質能力が違うのだから1人1人の能力を3cmずつ伸ばしてあげるのが教育。日本では、底上げ公平平等で努力主義であり、ある到達点に全員行かせてあげるのが教育。よってできる人ができない人の犠牲になっているとの見方もある。多くの児童をレベルアップさせるには、日本の現在の教室の在り方は有効かもしれないが、ラーメン屋さんですら個別化されている時代において(硬めや柔らかめなど)、学校だけが変わらないのはどうなのか。個別化によって新たに評価される子どもが出てきているのも事実であるとのことであった。

第2部 デザインレビュー

第2部では公共建築について建築家が市民への説明を行う「デザインレビュー」が行われた。冒頭の挨拶において、肥田雄三氏(横浜市建築局)は「横浜市の小中学校が今後約30年の間に384校が建て替えの対象となっており、コストを抑えながら良い学校をつくっていきたい」と述べられた。司会はJIA神奈川副代表の井上雅宏氏に代わり、柳澤潤氏(コンテンポラリーズ)、加茂紀和子氏(みかんぐみ)、八板晋太郎氏(八板建築設計事務所)の3名から神奈川県下で進行中(竣工済含む)の3つの学校建築について、プレゼンテーションが行われた。

柳澤氏は現在横浜市立上菅田笹の丘小学校という統

廃合の建て替えに取り組んでいる。周辺調査を大切に、既存校舎では顕著にあった表と裏を無くした学校をつくりたいとの説明がなされた。さらに特徴的なのは正門と南門を繋ぐ動線を軸に校舎中央に囲まれた庭をつくり、その周りに図書室、多目的室、キッズクラブなどを配置していることだった。地域の人々が利用するコミュニティハウスの配置も外部からの利用を視野に繰り返されたスタディが印象的だった。

加茂氏は小田原市立酒匂小学校内装木質化改修。小田原市が行っている「公共建築物等における木材の利用の促進」事業の一環。地域産木材の活用のみならず、施設の有効活用を促すことも視野に事業を進めていくとのこと。15校ほどが対象となり年度ごとに行われている。特徴的なのは改修後にカタログが作成され、社会に対して発信を行っていること。今回の計画では約15㎡の材を用いて、学校内において効果的な木質化の場所(昇降口、長い片廊下、学年室、多目的室)などに焦点をあて改修がなされていた。

八板氏は横浜市立都岡小学校で2021年10月に着工。敷地は大きな幹線道路の角地。敷地内で建て替えを行い「風の学び舎、みんなの広場」がテーマである。2つの門を結ぶコモンストリートと幹線交差点近傍のコミュニティハウス、教室棟の風や光が通り抜ける「風の道」と名付けられた階段室が的確に配置されていた。

2部合わせて約3時間半にも及んだが、大変内容が濃く有意義なフォーラムであり、会場でご協力いただいたアンケートからも良好な反応を得ることができた。今回のフォーラムの様子はJIA神奈川のYouTubeチャンネルでも配信中なので、多くの方にぜひご覧いただきたい。

私自身が全体を通して特に印象的だったのは、伊藤氏が述べられた「今のプロポーザルの仕組みにおいて、選ばれる案は【良い案】ではあるが【革新的な案】は選ばれにくい。『現在』の視点が強く将来をあまり見据えていない傾向」という部分であった。これは学校建築に限らず、今の建築業界、または社会全体をも言い得ているようにも思えた。成長期が終わりを告げ成熟期とも言われている現代日本において、それでも建てる意義や“挑戦”というものが今でも求められているのか、時代が再び大きく変わる中で見極めなければならないと感じた。

私が思う素晴らしい地域の風景

—渋谷区エリアの景観・歴史・環境遺産—



渋谷地域会 副代表
及川洋樹

2015年開催の第24回保存問題東京大会時に、東京14地域会の協力のもと「未来へ継承したい環境・景観・建造物・建築物」をテーマにまとめ、大会シンポジウムで各地域会から発表されました。その時の資料をベースに「未来へ継承したい風景」として連載しています。

縄文時代の頃の渋谷は沿岸部の入江で、人々は丘の部分に集まるように暮らしを営んでいた。江戸時代は丘のほとんどは武家屋敷が集積する土地で、身分が高い者が住む地域として活用された。こうした長い歴史を経て、1932年に「渋谷区」が誕生し、商業エリアと住宅エリアを上手に共存させながら繁栄している街として今に至る。現在は「若者の街」として知られる繁華街であり、東急グループが主導の再開発により、渋谷の高層ビル化と複合商業ビルの建設が進んでいる。

豊沢貝塚と猿楽古代住居跡

渋谷区内の遺跡の多くは縄文中期に属するもので、晩期の遺跡は恵比寿2丁目付近から発見されている。この一帯は渋谷区内でも最も低い台地で、土器片や石器などが発掘された。猿楽町一帯は古代人が居住していたところと推定。現在は住居跡の上を被覆し保存に努めている。数年前に私はこの跡地でアートイベントを行い、存在の周知を試みた。



豊沢貝塚（恵比寿2丁目）



古代住居跡公園（猿楽町）

広尾ガーデンヒルズ

マスタープラン：圓堂建築設計事務所（現：エンドウ・アソシエイツ）／1975年

「ヒル」と呼ばれる5つの区域が、それぞれ独自のコンセプトで設計されている。東京ではよく知られた超高額のいわゆる「ヴィンテージ・マンション」の筆頭格で、緑豊かで落ち着いた住環境の良さなどが評価され、竣工以来現在まで中古市場で高い人気を維持している。並木が美しく、私は好んでよくこの道を通る。



広尾ガーデンヒルズ

塔の家

設計：東孝光（東氏の初期の代表的住宅建築）／1966年

完成から40年以上が経つ建物でありながら、現在も見学者が後を絶たないほど、建築史上において多くの建築・建築家に影響を与えた建物の1つ。玄関を除けば、トイレも浴室も含め扉が一切なく、間仕切りもない。吹き抜けで開放的な空間設計が狭さを感じさせないという。近年中に私も見学したい。



塔の家（神宮前3丁目）

千駄ヶ谷トンネル

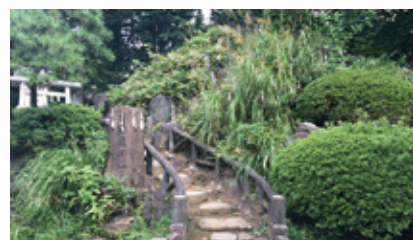
都市計画道路補助線街路第24号線（補助24号線）上の仙寿院交差点と神宮前交差点の間にあり、墓地をくぐる構造となっている。トンネル上に墓所を持つ寺院は法雲山仙寿院東漸寺。戦災復興院告示第15号により計画決定され、第1回東京オリンピックに合わせて整備された。現在トンネル内部の美しい壁面は落書きの被害に遭い消されている。1964年3月竣工、全長61m幅員20m。



千駄ヶ谷トンネル

鳩森神社内 富士塚

境内には「千駄ヶ谷の富士塚」として東京都の有形民俗文化財に指定されている富士塚があり、「千駄ヶ谷富士」とも呼称される。都内に現存する富士塚の中では最古。江戸の頃、富士の参拝登山は男性しか許されず、女性は富士塚で参拝したと聞く。寛政元（1789）年築。



鳩森神社の富士塚（千駄ヶ谷2丁目）

国立能楽堂

設計：大江宏／1983年

独立行政法人日本芸術文化振興会の能楽専門の公演場。591席。能楽や歌舞伎、落語、狂言など日本の伝統芸能を鑑賞できる。毎月、毎シーズン、さまざまな公演を行う。図書室や資料展示室も公開されており、日本の伝統芸能に関する知識を深められる場となっている。年数回は足を運びたい名所の1つ。



国立能楽堂(千駄ヶ谷4丁目)

東京体育館

竣工：1954年、改築設計：槇文彦／1990年

1954年、総工費3億5千万円(当時の価格)で東京都体育館が完成。槇文彦氏の設計で1990年に東京体育館として全面改築オープンした。2018年7月から2020年1月31日まで2020年東京オリンピックに向けて改修工事が再度実施される。圧巻の外観は蟹の甲羅のように見える。



東京体育館(千駄ヶ谷1丁目)

代々木村田マンション

1967年竣工。レトロな昭和のデザインで、入居者の多くが若いクリエイター。現在も満室で、アトリエや工房、ショップ、ギャラリー、オフィスなど多岐にわたる。人気の理由はクリエイター同士の交流、そして内装を自由に改装できるルールにある。古いマンションの在り方の成功事例として注目している。



代々木村田マンション(代々木4丁目)

国立代々木競技場

国指定重要文化財

設計：丹下健三／1964年(第1回東京オリンピック39日前に竣工)

第一体育館と第二体育館は、2021年11月に国の重要文化財に指定された。吊り橋と同様の吊り構造の技術を用いており、第一体育館は2本、第二体育館は1本の支柱から、屋根全体が吊り下げられている。観客を競技に集中させるために考案された、内部に柱を持たない珍しい構造の建物である。



国立代々木競技場

表参道

1919年に明治神宮の参道として整備された大通りが「表参道」。町域としての表参道には渋谷区神宮前が含まれ、銀座と並んで高級ブランドの旗艦店が軒を連ね、東京を代表するファッションブランドが集積するエリアである。個人的にはここに建築計画ができたなら喜ばしいエリアの1つ。



表参道

金王八幡神社(旧渋谷八幡神社)と豊栄稲荷神社

社伝によれば、寛治6(1092)年に渋谷城を築き渋谷氏の祖となった河崎基家(渋谷重家)によって創建されたとされる。社名にある「金王」は、重家の嫡男常光がこの神社に祈願して金剛夜叉明王の化身として生まれたことにより金王丸と称したことによるとされる。道を挟んだ隣には、渋谷氏によって創建された田中稲荷神社と豊栄稲荷神社が合祀されて建立された神社がある。「1961年完成 主祭神：宇迦之御魂命」連立する鳥居と社殿のバランスが非常に美しい。



金王八幡宮

豊栄稲荷神社

代官山旧山手通り・ヒルサイドテラス

設計：槇文彦／1969年～1998年

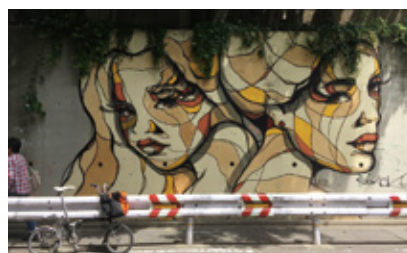
ヒルサイドテラスは、渋谷区猿楽町・鉢山町の旧山手通り沿いにある集合住宅、店舗、オフィスなどから成る複合施設である。2021年『タイムアウト東京』は「世界で最もクールな49の街」の日本語版を公開し、代官山が35位にランクイン。食や遊び、文化の分野を重要視したほか、昨今の新型コロナの状況も踏まえ、コミュニティーの精神、回復力、持続可能性なども評価ポイントに挙げた。



旧山手通りとヒルサイドテラス

エル・ボチョの壁画

エル・ボチョが2016年個展で来日の際に制作。歩行者の心に語りかける。



ストリートアーティスト、エル・ボチョの壁画(鉢山町)

建築家によるファシリテーション

—カイロ旧市街、住民参加の保存まちづくり—



建築まちづくり委員会
委員長
連 健夫

オンラインで連携、エジプト人建築家のファシリテーション

文化庁からの受託事業でカイロ旧市街の保存まちづくりに関わっている。カイロ旧市街のスーク・シラーハ通りと6つの歴史的建築物の利用保存が目的で、住民の意見・要望を取り入れるべく、今年1月に日本側とオンラインで連携して住民ワークショップを実施した。現地の建築家アラー・ハプシー氏(メヌーフィア大学教授)とサラール・ザキー氏(アズハル大学教授)がファシリテーションを行い、住民から多くの意見や要望が得られ、内容の濃いワークショップとなった。彼らには事前に『建築系のためのまちづくり入門』の一部をアレンジして送付し、住民参加のファシリテーションを理解していただいた上で行った。深見奈緒子氏(日本学術振興会カイロ研究連絡センター長)による歴史的建物についての説明により、住民自身が自らの街や建築の価値を理解する機会となり、住民の発表に対してオンラインで日本側から日本の事例を紹介するなど、キャッチボールもできた。今後、建築家により住民の意見を取り入れた更新案ができる予定である。



『建築系のためのまちづくり入門』(学芸出版社)

建築家の役割の拡がりとはファシリテーションの重要性

このワークショップでも観られるように、建築家の役割は多様化している。現地建築家はファシリテーションを行い、住民の意見を取り入れた更新案を設計するという役割、日本側の建築家は情報を提供し、アドバイスをするという役割である。日本においても既存を活かすリノベーションを含めた増築、減築、改築など、多様な手立ての組み合わせという編集設計の時代に入ってきている。技術は専門化、高度化する中、建築家がオールマイティーな役割を担うことは難しくなり、さまざまな専門家とコラボレーションする形が増えている。

この中で、イニシアティブをとる建築家にはファシリテーション能力、すなわち、促進力、調停力が求められる。各専門家の力を引き出し、ある方向に創造的にオーソライズする力である。住民参加のまちづくりは、さま

ざまな立場の人が関わっており、さまざまな意見に方向性を与える合意形成の力が求められる。建築における参加のデザインも同様である。最近の公共建築では、住民参加の機会が求められ、設計者にファシリテーション能力が必要とされるのである。

建築家によるファシリテーション

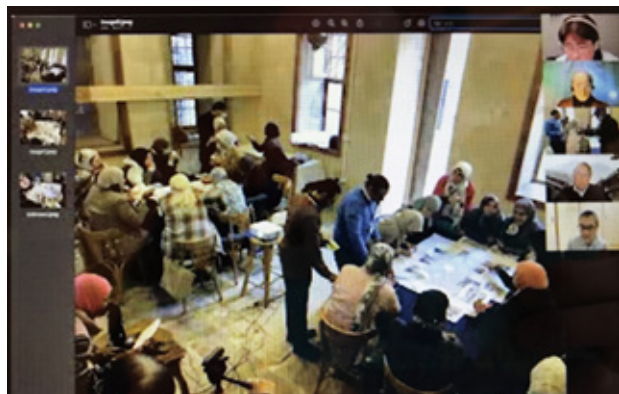
ファシリテーションは、ワークショップの運営や合意形成のスキルがあれば可能である。しかし、参加者にアイデアを示して議論を深めることは、ファシリテーター自身が専門性を持たないとできない。つまり、建築の専門性を軸として、周りと繋がる両手を持つという、T字型専門家の必要性である。このことにより、複数の専門家をまとめたり、住民や利用者の意見から方向性を見出すこともできるのである。

このファシリテーションの留意点として、①フラットな関係が大切→創造的議論をするためには啓蒙的な上から目線ではうまくいかない。②人の意見を膨らませることが大切→こちらから一方的に、これが良い、では押し付けになる。③開かれた気持ちを持ち誰も取り残さない→ネガティブな意見を言う人も、コミュニケーションを通して推進者になってくれることもある。

これからの建築家にとって、さまざまな状況に応じた複数のカードを持つことは大切なのである。

〈注〉

- 1: JCAABE(一般社団法人 日本建築まちづくり適正支援機構)が受託した「令和3年度緊急的文化遺産保護国際貢献事業(専門家交流)」
- 2: 布野修司、岡田保良、磯野哲郎、荒牧澄彦、宍戸克実、連健夫
※オンライン支援: 柏木裕之、檜山元一郎、松村哲志



エジプト人建築家のファシリテーションによる住民ワークショップ

オンラインセミナーのstep up

—専用機材を使って配信しよう—



中澤克秀

コロナ禍でオンラインが激増

会員同士が集まることができない状況で、オンラインでのZoom会議が各地で広がりました。大人数のセミナーに適した方法がZoomウェビナーだと分かり、広報委員会やJIA神奈川で暗中模索しながら、トライ＆エラーを繰り返し開催しました。そこで分かったことが音の問題です。

音の問題

映像について気を取られてしまいがちですが、盲点は音でした。実際にオンラインで一番問題になるのは、人の声が聞きづらいことです。アンケートでも一番不満になることが分かりました。音の問題は容易には解決できません。会議用スピーカーでは離れると声が届かなくなり、話す人の声質にも影響します。既存のマイクやPC内蔵マイクではハウリングを起こします。

プロを入れて開催

「JIA・SDGs建築フォーラム2021」等はプロに依頼して映像と音に対応しました。映像・音声の高いクオリティと現場トラブルの対応の早さは魅力ですが、スタッフが増えると、準備打ち合わせ、セッティングに時間がかかります。そして何よりも費用がかかります。簡単にプロを呼べば済むことではないのは明白です。

JIAで自前の機材を購入することを提案

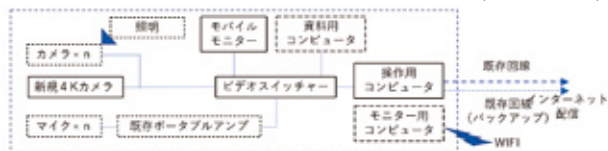
何度もZoomウェビナーでイベントを経験してくると、既存のシステムには限界があり、支部本部を通してJIAで自前の機材を使って配信できないか、機材購入WG内で検討し、常任幹事会、役員会で提案してようやく1回目のイベントを行うところまでできました。

機材のシステム紹介

メインはビデオスイッチャー (Roland VR-1HD) です。こちらにすべての機材 (カメラやマイク等) を繋ぎ、操作PC (ホスト) に信号を送り込みます。機種は、いろいろなJIA会員に使ってもらうことを前提に、ボタンなどが分かりやすく誰でも直感的に操作できること、多機能は不要、ということポイントを選定しました。カメラは2台購入、全景 (会場全体) と近景 (ズーム) で使い分けます。マイクは既存のスピー



ビデオスイッチャー (Roland VR-1HD)



機材レイアウト概念図

カーシステムにケーブルを追加することで使えることが分かりました。一番悩んだのはケーブル類ですが、本部からも意見をいただきつつ、機材購入WG内で検討しました。

11月住宅部会の日に機材をお披露目

11月の住宅部会の日に、建築家中村拓志氏をゲストに建築家会館大ホールでオンラインセミナーがあり、そこで購入機材を使った配信を試みました。その前に数回練習を重ね、住宅部会メンバーと初の配信です。セミナーの内容については、YouTube (<https://youtu.be/vyjwBVMHSG4>) にも公開していますので、ここでは特に機材を扱う際の注意点を記します。

機材を扱う時の注意点

①配信ホストはZoomウェビナーの豊富な経験者からアドバイスをもらおう。

機材に気を取られて、いつもならできることでもミスが起こります。配信ホストと機材係 (スイッチャー) はきっちりと分けて、配信ホストの仕事に集中できるように人選してください。



②電源コードやケーブル類がたくさんあるので、順番に繋ぎながら床や机にテープで固定しよう。

ケーブル類はびっくりするほどの量になり、足で引っ掛けてカメラを倒す危険性があります。注意してください。



③Zoom内でのビデオやマイクの選択を間違えないように確認しよう。

ビデオ、マイク、スピーカーの設定をZoom内で選択します。選択が間違っていると、音が出なかったり映像が流れません。その原因として機材の方に目が向きがちなので、盲点となります。



④オンライン視聴者に見えている状況を確認しながら配信しよう。

配信ホストPCやパネリストPCでは視聴者と見え方が違うので、別のデバイス (スマホやタブレットでOK) で配信状況を確認しながら進めてください。特にカメラ係の確認は重要です。



今後の運用

音響マニアでもない私が、初めての経験を繰り返し、機材の使い方をYouTubeで学び、人に教えるレベルにまでなりました。皆さんも数回経験すれば使いこなせるようになります。まずは経験者の手伝いや見学をしながら、この機材をマスターしてみてください。

連続の心地よさを求めて



寺尾信子

2021年12月29日の朝、京都嵐山・渡月橋の南側の宿から2年前にオープンした福田美術館に向かった。嵐山を背にして大堰川(桂川)対岸から臨む福田美術館とMUNIホテルは今まで永くそこに居たかのように、朝日を浴びて、景観の中にじっくり溶け込む静かな佇まいだった。いずれも安田幸一氏の設計、構造設計は金箱温春氏である。前日はMUNIホテルのカフェの室内から川と橋の景観を楽しんだ。福田美術館では木島櫻谷(1877-1938)展を鑑賞した。櫻谷は、明治10年に京都三条の商家に生まれた近代の京都画壇を代表する巨匠。展示内容が素晴らしく、ぐんぐん引き込まれた。精緻な花鳥画はもとより、動物画、人物画、歴史画、庶民の生活風景画まで幅が広く、感銘を受けた。群をなして飛ぶ鳥の美しい色合いと羽ばたきが聞こえそうな動的な作品に目が釘付けになった。ふと見ると100年前の作品。宿から歩いて橋を渡って館に入り、建築を楽しみながら緩やかな階段を進んで、足の停まったところに100年前の絵。この快さは何だろう……。お茶を片手に、カフェでぼんやり川を眺めながら、その心地よさは、時空を超えた「連続」かもしれない、と思った。嵐山に美術館をつくろうとされた創始者の方の思いと託された建築家の思い、秀逸な企画を練る主催者の思い、さまざまな思いが繋がって、人の心に豊かな実りを着地させてくれる。次回の再訪への思いも連続させてくれた、心豊かな暮れであった。

2021年は連続についての思いを在住の杉並でも経験した。北山恒さんから『東京人』(2021.12/No.447)を送っていただいた。1971年入学(横浜国大)の同級生の氏からは、横国大、法政大教授へと研究の場を移された後も、時折、著書をいただいていた。「テーマ『コモンズを再生する東京』に『阿佐谷パールセンター』のことも扱っているのだから……」との添え書き。法政大学「江戸東京研究センター」を陣内秀信氏(法政大名誉教授、杉並区在住)と共に立ち上げ、「近未来東京研究」をテーマに5年間研究、成果は『未来都市はムラに近似する』(彰国社)にまとめられている。2020年に「『紐マップ』でコモンズ再生を示す」という商店街研究が行われ、『東京人』はその特集記事。商店街は線状の公共空間を地域に提供してい

る、という法政大学大学院チームの紐マップは圧巻である。通勤者が地域に戻ってきた時、今までにない新コミュニティが生まれることは容易に想像できる。区内には「古道」を含む道・幹線道路、鉄道用地、河川などが東西と南北に縦糸・横糸のように織りなしている。それらはコミュニティのことを考えるときにも、2050年脱炭素社会の地産地消型再生可能エネルギーのネットワークを考えるとときにも有望な線状空間、地勢を考えるとまちづくりの手掛かりが得られそうなことに気づく年でもあった。

※都内の商店街を地図にプロット、商店街の徒歩圏を約600mとすると、23区はほぼすべてカバーする、との注釈がある。

京都から杉並へ、そして江戸川区の葛西臨海水族園へ思いを巡らせる。2020年にJIA環境会議の中に「超・環境配慮型リノベーションWG」(主査:安田幸一氏)が立ち上がった。谷口吉生氏設計の葛西臨海水族園が30年強の歴史を終えてしまうかもしれない、危機感を有志で共有し、歴史を連続させようと2021年も必死であった。安田氏の描かれた太平洋パースは活動のシンボル画である。東京都は2022年1月12日にBTO(建設・譲渡・運営)方式で整備する「葛西臨海水族園(仮称)整備事業」をWTO対象の一般競争入札で公告した。美しいガラスドーム棟の歴史が断ち切られることは、ぎりぎりのところで回避できたようだ。しかしその存続のし方が、これまで園を来訪した6,000万人の都民や来館者にとっても、心地良い継承となれるのか、今は不安のほうはずっと大きい。1000年でも、数百年でもない30年余の美しい景観・建築の歴史を連続させるため、太平洋パースは今年も連続への期待を大きく背負っている。



葛西臨海水族園-再生提案活動シンボル画-太平洋パース(JIA環境会議-超・環境配慮型リノベーションWG)

身近な活動と共に

小林佐絵子



2015年に独立して6年半が経過しました。もともと文系だった私が建築で生活することを決めてから、約20年が経過しようとしています。最近までは住宅設計や家具デザインが中心でしたが、昨年は独立前に所属していた設計事務所の遠藤克彦と共同で参加したプロポーザルが機会となり、千葉県鋸南町^{きよなんまち}で公共建築（鋸南町都市交流施設周辺整備事業）の設計に携わっています。現地拠点を設立し、設計者主催のワークショップを全4回開催しました。最終回は住民主導で企画することができ、官主導のトップダウンではなく、住民主体のプロジェクトとなることで町の循環拠点としての機能を持つ建築（道の駅）を目指しています。

住民主体を考えるきっかけとなっているのは、私自身が出身地の神奈川県大磯町で旧邸などを案内する大磯ガイド協会での活動経験があります。仕事をリタイヤされた方から現役世代まで活躍されていますが、皆さん地元愛が強く、訪れた方々をもてなす工夫もさまざまです。旧吉田茂邸や一昨年整備が始まった明治記念大磯庭園（旧大隈重信邸・陸奥宗光別邸跡）など、活躍の場は広がっています。人が生き活きと活動すると、建築も町も活気が出ます。このコロナ禍でも高齢化社会においても、世代を超えた繋がりや共通の意識が大きな軸になるのだと感じています。

新しくモノをつくることだけが建築家の職能ではない。今、コトの創作を起点に、しかしそれでも新しいかたちを模索していきたい自分がいます。表現とは、かたちとは、関係性とは何か。歴史の中に置かれた今の自分の立ち位置を、身近な活動と共にこれからも考えていきたいと思えます。



鋸南町都市交流施設周辺整備の一環として計画されている回遊通路「わっか」完成イメージ（遠藤克彦建築研究所・アトリエコ設計共同体）

JIAは広い世界への扉

蔵楽友美



私は個人邸を中心とした設計活動をしており、独立して11年になります。それぞれのクライアントにとって価値のある着地点を目指し、素材の表現力とそのバランスを考えた、美しく気持ちの良い空間づくりを心掛けています。国士舘大学での非常勤講師が7年目で、設計課題の実習指導に加え、インテリアデザインの講義も担当しています。私にとって大学は、学生や同僚の建築家から自分とは異なる価値観を学ぶ場でもあります。何といっても次の建築界を担う人材を育てる責任を強く感じる場です。若い学生たちの将来に思いを馳せる中で、私の年代になれば職能を通じた社会貢献に自覚的に取り組むべきだと考えるようになり、より広い世界と仲間を求めてJIAに入会させていただきました。

京都工芸繊維大学大学院から東京の芦原太郎建築事務所に入所した新人の頃から、所長のUIA大会への参加、日本への大会誘致活動、海外の建築家との交流の様子をそばで見してきました。独立してからはUIA2011東京大会やACA18（アルカジア東京大会）のお手伝いをさせていただく機会にも恵まれ、こうした経験から国際委員会での活動を希望し、早速「越境建築家」ウェビナーの企画に参加しています。JIAの先輩方と一緒に、ひとりではできないことも行けない場所も、と夢がふくらんでいます。これまで気楽(?)なお手伝いの立場だった自分が、これからは正会員の立場である緊張感も感じています。渋谷地域会、住宅部会でも新しい出会いや多様な価値観に触れ、自分の世界の広がりを実感する日々です。支部や委員会の横つなぎ、世代の縦つなぎ役にもなれればと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。



芦原太郎氏からいただいた20年前（2002年）のUIAベルリン大会のコンgresバッグ。UIA2011で広報チームに参加、ACA18コミッティーでは展示物を担当し、アジア各国からの展示パネルの入稿データを管理した。

交流委員会 Dグループ

人と人の繋がりが良縁を生む

—交流委員会恒例の新春行事の歴史—



交流委員会
Dグループ幹事
ワイス・ワイス
立石博巳

JIA会員の皆様、交流委員会の新春行事として、「新春そばの会」「豊島屋酒造、酒蔵見学会」が約20年前からDグループ主催で開催されてきました。今までに大勢の皆様にご参加いただきましたが、ここ2年はコロナ禍で中止となり、本年も残念ながら開催を断念し、皆様にご迷惑をおかけしました。

さて、この会の歴史は古く、当時三越建装部に在籍された安井良博氏が「そば打ちの会」を中央工学校の趣味講座でなされ、その後、全廻連のそば打ちの最高段位五段を取得されました。2015年にはユニオン在籍の土屋照雄氏もめでたく五段を取得され、他にもメンバーが加わり、新たに“そば名人”が2人誕生しました。そして本拠を梅島の蕎麦屋「藪重」の2階に定め、店主の石井師匠のご指導、蕎麦談義を受け、交流委員会の皆様をお迎えして石井師匠、安井さん、土屋さんたち名人の打った美味しいお蕎麦と、店主肝入りのフグ料理のセットとひれ酒をいただき、歓談してお土産のお蕎麦を手にして三々五々帰路につきました。

その後「そばの会」の延長線上でセミナー、イベントが建築家会館の大ホールで開催されるたびに、安井さん、土屋さんたちがホール脇のカウンターに1つあるガスコンロでそばを茹で、丼に薬味とともに盛りつけ提供して絶賛を浴びていました。帰りにはそばのお土産をお持ち帰りいただき、JIA関東甲信越支部の名物となりました。

2月の新酒の仕込み時期には、創業450年の老舗「豊島屋酒造」の酒蔵工場見学会です。「豊島屋酒造」の歴史は古く、江戸時代、鎌倉河岸（現在の千代田区内神田）に全国から物産を満載した船が着き荷上げされ、携わる人々に灘から取り寄せたお酒を提供したのが始まりと

伺っております。現在もまだその場所にお店があるそうです。その後、東村山に醸造元として豊島屋酒造を設立し、富士山の湧水という水で日本酒の製造に関わられています。銘柄は「お江戸日本橋」「金婚^{おくのかみ}」「屋守」「十右衛門^{みりん}」など、名酒は他にも何種類もあり、真の味^{みりん}や、今では全国で3社ほどしか製造していない雛祭りの白酒（これはお酒なので子どもは飲めません。三越さん、高島屋さんくらいにしか置いておりません）などがあります。

三越さんとの関係も深く、安井さんが発案され私もお手伝いしてこの会を発足しました。酒蔵見学後、日本酒がどのように作られるのかを勉強して、別室にてJIAのメンバーと蕎麦の会のメンバー50名くらいが豊島屋酒造肝入りの鍋料理（具は千差万別の豪華版）と新酒飲み放題。田中良彦副社長の豊島屋の歴史とお酒にまつわる楽しいお話も頂戴して、皆様個々に名酒や味^{みりん}、白酒等を求めて、持てない方は宅急便にて自宅まで届けてもらい、純正な酒粕をお土産にいただきタクシーを数台呼んで帰路につきました。

私と安井さんは同じ百貨店同士でライバルでしたが、安井氏が外商部から建装部に異動したということは、商売のやり方が全く違うので、私は彼を私の顧客のところに案内して違いを教えたあげたこともありました。また豊島屋酒造の田中良彦副社長は、私のボーイスカウトの友人の小山氏と中央大学の同級生で、小山氏が仲間を連れて工場見学に訪れたと聞いた時はビックリしました。小山氏は中央大学のスカウトも兼任しています。世の中は狭く、人と人の繋がりが良縁を生みますね。

このような催しが1日も早く開催できますよう心より望んでおります。



「新春そばの会」 左から、長尾グループ長、富田様、佐藤様、立石



豊島屋酒造の田中副社長（左）と安井良博様の挨拶



見学後、鍋と新酒をいただく。写真左が土屋照雄様

交流委員会 Fグループ

1年半ぶりの対面イベント開催

—フジマック 東京クッキングラボラトリー見学—



交流委員会
Fグループ幹事
ヒラカワ
服部雅子

交流委員会Fグループは、昨年度に引き続き、今年度もイベントの計画に苦戦していましたが、年末に約1年半ぶりに顔を合わせてのイベントを開催することができましたので、その様子をご報告させていただきます。

2021年12月に、忘年会を兼ねた施設見学会として、業務用厨房機器メーカー フジマックの東京クッキングラボラトリー（東京都港区南麻布1-7-23）の見学会を開催しました。Fグループから正会員2名、協力会員15名、またEグループから1名が参加しました。新型コロナウイルスの蔓延状況に鑑み、残念ながら懇親会は見送ることにしましたが、感染症対策を十分に行いながら、多くの方々に参加いただき交流を深めることができました。

東京クッキングラボラトリーはフジマックの最新機器に触れることができる施設です。当日は、「業種別厨房計画～厨房施工例と見せる厨房～」というテーマで約1時間の講演の後に、クッキングライブの視聴と試食をさせていただきました。

クッキングライブでは、2つの調理機器を実演していただきました。1つ目は、焼く・炒める・揚げるなど、鍋の役割を1台に集約した「バリオシリーズ」です。中でも今回は、左右のグリルパンで別メニューの調理が可能な「バリオ デュアルパンシリーズ」の紹介がありました。高速かつ均一に加熱できるのが特徴で、当日試食したメニューの鯖も、火が通っているのに柔らかく、噛むほどに美味しい仕上がりになっていました。

2つ目は、熱と蒸気を利用し、1台で加熱調理のほとん



試食したメニュー
「バリオシリーズ」
・鯛とオリーブのクロケット
トリュフ風味
・鯖のミキュイソースサルビ
コン アボガドのタルタル
「コンビオープン」
・ローストビーフソースマ
デラ ジャガイモとゴルゴン
ゼーラのグラタン 野菜
のグリル添え
・ピラフ
・クリームブリュレ

どに対応している万能調理機器「コンビオープン」です。自動調理機能が備わっており、操作パネルで食材と調理モードを選ぶだけで簡単に料理ができて上がります。それだけでなく、調理人独自の設定を保存することが可能で、味の安定性が保証されます。また、オープンには10段になっていて、各段で異なる食材を調理しても、それぞれに最適な調理時間が自動調整されます。その際に気なる臭い移りも、自動蒸気浄化システムにより常に清潔な空気がオープン内を循環しているため心配ありません。

普段目にすることのない調理機器ですが、このような機器が活躍し、効率良く一度に大量の美味しい料理が作られている様子を、参加した皆様は興味深くご覧になっていました。ご協力いただいたフジマックのスタッフの皆様、誠にありがとうございました。

まだまだ新型コロナウイルスの拡大が心配される世の中ですが、今後も十分な対策を取りながら、可能な限り正会員、協力会員の皆様との交流の機会をつくっていただければと考えています。



講演の様子



最新の業務用機器を使った調理を実演。シェフの前にあるのが「バリオシリーズ」

仕事を生み出す力を鍛える



田口知子

小さなコンペで経験を積む

私が設計事務所を立ち上げて、25年の月日が経ちました。独立して最初の仕事は、広島県の小学校時代の同級生の家でした。「三角形の安い土地を購入したけれど、ハウスメーカーに頼んだらこんな土地には建てられません」と言われた。田口さんなら設計できますか？という電話でした。その話を聞き、これは私の仕事だ！と直感しました。クライアントの人柄もわかっており「大丈夫よ！私に任せて」と即決。三角形の土地形状を活かした小さな家を設計し、新建築住宅特集にも掲載いただき、好調なスタートでした。

とはいえ、最初のころは仕事がなく、知人や親戚の仕事をぼちぼちこなすだけではやっていけません。そのころインターネットで「ハウスコンペ」という住宅のコンペサイトがあり、気軽に応募できるので、私もたくさん応募しました。現地説明会に参加し、設計案を送ると施主がその中から設計者を選定する、というコンペで、数十人の応募がありましたが、自分は一時勝率8割を超え、貴重な営業ツールになりました。そこで身につけたのは、住宅においては、建て主が求めていることをどこまでも緻密に聞き、形に変換する力です。また、コンペならではの明快なコンセプトも大切。小さいコンペから、さまざまなことを学びました。そうこうしているうちに施工実績も増え、ホームページからの依頼も入るようになっていきました。

設計事務所の費用感と提案力を実感してもらう

初めてお会いする方の仕事を受注する際、私たちが行っていることは、契約前に有料で提案書を作成する、という方法です。費用は、住宅なら10万円～15万円です。「提案が気に入らなければその費用をいただいて完了できます。気に入ったら、提案料は設計料に含むので、設計契約に進んでください。」という条件です。提案料を高いと感じる方もおられますが、ここで費用を出し渋る方は、設計事務所との家づくりは難しい、と経験を通して感じています。設計提案が有料であると伝えることで、無駄なサービス設計を避ける目的もあります。

この条件を了解された方には、1ヵ月程度の時間で、

土地を見てヒアリングをし、建築の平面、断面、模型、概算まで一気に作ります。最初の提案でここまでやるのは、設計事務所の費用感と提案力を実感してもらうためです。提案書に概算工事費と設計料も提示し、トータルで予算に収まるように設計します。工事費概算は目安ですが、坪単価は無理のない金額で入れます。工事費の目標から予定の坪単価で面積を計算すると、施主の要望よりもだいたい小さくなります。面積は小さくなくても、広く感じる工夫や建築の魅力で、その人が満足できるものは実現できる、ということを具体的な案を通して理解してもらうことが大切だと思っています。提案書を作らせていただいた方とは9割以上の確率で設計契約に至っており、その後の設計を進めていく指針として大切なものになります。

住む人が満足し、楽しさが残るコストコントロールを

どうしても広さが必要で、坪単価の安い設計条件になるときは、実施設計終了後に何社かに相見積もりを取り、数量や単価の査定、設計内容の調整などでコストコントロールを行います。そのとき、どんなに仕上げや設備が安くなっても、断熱などの基本性能を損なわず、住む人の満足や楽しさが残るようにつくることはできると考え、全力で奮闘します。大変なこともありますが、それが自分たちの仕事の存在意義だと思っています。

これからの時代、新築の建築をつくる機会は減っていき、既存の再利用、維持管理することのほうが重要になっていくと思います。このような時代にあっても、そこにある複合的な問題を見極め、解決法を考えること、統合する力、コミュニケーション力など多様な「建築力」は、仕事を生み出す大きな原動力になると信じて、研鑽を積んでいきたいと考えています。



独立して最初に設計した「三角地の家」模型。図面より模型で伝えることが多い。

原点としての卒業設計

—都市の奥性を、建築空間へと置換する—



岡野道子

2001年東京理科大学卒業／2003年東京理科大学大学院修了

都市体験と卒業設計

私の卒業設計模型は内部が見えないものでした。大きさは畳1.5畳ほどあり、分割しているので断面が見えるのですが、奥までは見えません。なぜなら細長い管状の空間がグネグネと曲がりくねって複雑に絡まり合っていたからです。その空間は、子どもの頃に池袋駅の地下街を歩き回った時の体験から発想しています。

小学生の頃、塾の行き帰りに池袋駅構内からデパートの地下街を抜け、本屋を通ってまた駅構内へ接続してから電車に乗るというように、その迷路的な奥行きに楽しさを感じていました。私が幼少期に過ごした町は坂道が多く、細く曲がりくねった道がたくさんありましたが、池袋駅が立体的な通路空間に思え、幼少期の空間体験と近いものを感じました。

大学も池袋を経由して通学していたので、さらに過ごす時間が多くなります。模型材料を購入する道中、夜中まで営業している老舗の喫茶店で過ごしながら授業のレポートやスケッチをしたり、書店で何時間も建築の本を読みふけったり、町を観察しながら課題のコンセプトを考えたり、都市で過ごしながら空間や建築について考えることに居心地の良さを感じていました。同じ頃、劇作家の宮沢章夫氏の「サーチエンジン・システムクラッシュ」という池袋を舞台とした小説を読みました。主人公が池袋を彷徨する際の奥行のある空間描写に魅了され、卒業設計では池袋という都市体験を、建築の空間的な価値として表現することができないか考えました。

設計の手法

まず池袋の街区にあった建物のプログラムを、管状の空間に置換しました。それらを上下左右に折り曲げ組み合わせることで、立体的な街路のような建築をつくりました(図1)。空間体験としては、何度も通路を曲がることで徐々に奥へと進んでいるように認識するのですが、突如外に出て町の風景を見ることが出来る場もあるというように、内外を断続的に体験できます。プログラムのほとんどは商業施設のため、倉庫やバックヤードが通路に沿って帯状に付随します(図2)。池袋での都市体験を建築空間として再構成したともいえます。しかし、内側から



1: 細長い管状のボリューム 2: 通路とバックヤード 3: シークエンスの一部
卒業設計「DEPTH SYSTEM」(2001)
(東京理科大学にて優秀賞(3位)受賞→檸檬画翠2001年に出演)

だけの場面展開を意識してつくったため、外観についての論理が抜け落ちていました(図3)。その結果、ほとんどが壁で閉じたものになってしまい、大学の卒業設計講評会で選拔され発表するも、胃カメラでも入れない限り模型の中を覗けないので、最初はあまり理解されませんでした。ところが、動線計画を詳細に説明すると、1人の建築家が応援演説をはじめ、2位争いとなり、最終的に3位になりました。講評会では自分の考えていたこと以上の議論が繰り広げられ、とても興奮した記憶があります。

修士設計への展開

修士設計では都市のファサードと奥を同じ構成とすることで、表裏のない都市体験ができる空間を目指しました。また、都市を内側からだけではなく、外側からの視点も含めて捉え直します。建築を都市環境に対して応答させることで、迷路的な道空間の構成に外部との関係性を持たせることができました。結果は学内で最優秀賞となり、JIAに出展することができました。

卒業設計と今

卒業設計は、自分のイメージを具現化することの難しさに、苦しみ悩むものですが、自由に建築を構想できる幸せな時間でもあります。当時考えていたことは、今もなお自分が興味を持っているテーマであり、今でも更新し続けていきたいと思っています。また、学生にとっては、自分の考えが建築家の議論によって想像以上に広がることが大きな刺激となり、次へと走り出すきっかけとなります。そういった機会をつくることも私の役割だと思っています。



自動運転を見据えて

JIA 学生会員 **須藤勇海**
すとういさみ
東京大学大学院機械工学専攻 修士2年

こんにちは、学生会員の須藤勇海です。私はものづくりの中でも特に車が好きで、東京大学で機械工学を専攻しています。今回は、そんな車好きの自分が活動中の、車×建築のプロジェクトを紹介したいと思います。

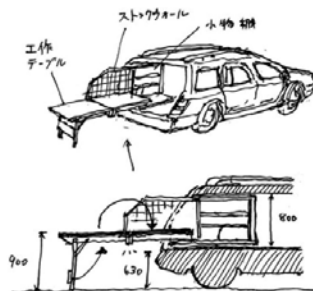
プロジェクト「marble-muffler」（以下m-m）は、車のトランクに建築空間を載せて、全国の廃校で工作教室ができるように設計製作するというものです。

これを始めたきっかけは、自動車業界の流れでした。近い将来、自動運転が当たり前になると、従来運転していた時間を別のことに使うことができるようになるので、自動車メーカーはリビングを切り取って載せたような自動運転車を構想し始めました。このような自動運転車が普及した未来では、移動空間と生活空間、つまり車の領域と建築の領域がより密接になると考えられます。この際に、自動運転車がどれほど豊かな空間になるかは、車と建築がいかに融合するかにかかっていると思い、活動を始めました。

現代には、キャンピングカーやキッチンカーがありますが、トラックや大きいバンなど一部の車種に限られ、すべての車



須藤（右）と蓮溪（東京藝術大学大学院建築専攻修士2年）。「marble-muffler」で改造中の車（VWゴルフワゴン）。車検も自分たちで取得。



改造イメージ。
全国の廃校で工作教室ができる仕様に鋭意改造中。

に適合していません。そこで「m-m」では、一般家庭用のワゴン車をベースに、車と建築がどこまでうまく融合できるのか、設計製作しながら実際に車を使うことで実証実験しています。

現在は、工房車を製作し、直近では新潟で工作ワークショップを開催しました。将来的には銭湯車、映画車、ギャラリー車……のように、1つのコンテンツを1台に載せて、それらが集まった移動村を構想しています。



空き家改修を通じた 地域の活性化活動で感じること

JIA 学生会員 **川村寛樹**
かわむらひろき
芝浦工業大学建築学部 3年

私は高知県の田舎に、3人兄弟の末っ子として生まれました。幼少期は両親と家族5人で狭いアパート暮らしをしており、「いつか大きな家に住みたい」そう思っていました。しかし、中学生の頃には「自分で大きな家を建てたい」と、そんな思いが変わっていったのです。工業高校の建築科を卒業した私は、さらに建築のことを学ぼうと現在の大学へと進学することを決意しました。

そして現在、私は高校や大学で学んできた建築の知識や技術を社会のために還元したいと、「空き家改修プロジェクト」という学生団体で活動しています。

過疎化、高齢化が進む地方では、同時に空き家問題も深刻化しています。そこで我々建築学生が、自分たちで設計・施工をし、その地域の憩いの場となる場所の創生に取り組んでいます。活動をする中で、学業との両立や学生であるゆえのその選択肢の狭さに歯がゆい思いをすることもあります。しかし、地元のお年寄りの方たちに「素敵な場所にしてね」「暑



団体メンバーとの写真。現在後ろに写る物件の改修中です。

い中ありがとう」と声をかけられると、「ああ、これが建築の楽しさなのかもな」と感じるがあります。「自分で大きな家を建てたい」という思いは、今、「自分がつくる建築で誰かに笑顔をとどけたい」、そんな気持ちに変化しているのだと思いました。

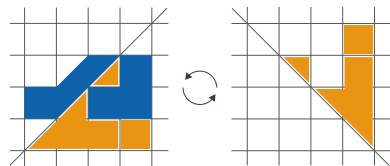
まだまだ学ぶべきことがたくさんありますが、自分の芯になる部分は大切に、日々を過ごしたいと思っています。

ジョイント 正式名称が「学生の会 @joint」に決定しました！

これまで学生会(仮)として活動していましたが、正式名称を「学生の会 ジョイント (@joint)」として正式に活動を承認していただきました。この名称は、普段の大学生活では交わることのない他大学の学生や、他学年、建築家の方たちを「つなぐ」という意味で、学生の会発足当初から目標として掲げていた思いを言葉にしました。今後も、建築によって生まれた「joint」を大切に、この輪を広げられるよう活動していきます。メンバーは20名(2022年2月末現在)とまだまだ発展途上ですが、ご興味のある方はぜひjoint@jia-kanto.orgまでご連絡ください！

ロゴも決定！

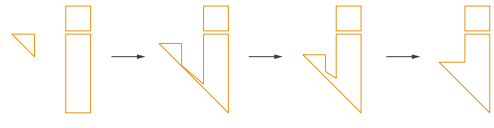
正式名称に合わせてロゴも作成しました。メンバー内でデザインコンペを行い、井筒悠斗さんの案が選ばれました。このロゴは、名称にも込めた「JIAを通して交流機会の少ない学生や建築家の方々とつながる」という思いを表現しています。ロゴ全体がJIAのロゴと組み合わさる形でJIAとのjointを、小さな三角が大きな図形に引かれるような構図で、別の場所にいる学生が加わることで生まれる同年代のjointを表現しています。また、色はJIAのロゴの補色となっており、相互に交流・支援している関係を表しました。このような意味を込めた図形は全体としてjointの「j」になっています。



JIAロゴとの組み合わせ



JIAロゴとの補色関係



jointする様子

この春、挑戦したいこと

編集後記

- 数年前から整体で体のメンテナンスをしているが、重要なファクターは体重を落とすことだった、現状から1割減量するぞ。(望月)
- 気持ちよい季節に変わる中、運動不足解消のためもう少し体を動かしたい。ジョギング？筋トレ？まずはストレッチからかなあ…。(関本)
- 朝型の生活にシフトして2年が経ちました。冬に比べて暖かくなる春は気持ち良く目覚められるので早起きするのが楽になります。(青木)
- この春の節目に、過去のもう見ない雑誌など処分したいと思っていますが捨てるのが難しい。整理の仕方を教えてほしいです。(佐久間)
- JIAのカーボンニュートラルに出られた秋田の西方里見先生、後で私の家族とのご縁がありました。JIA35年在籍で良かったです。(立石)

- 夏のオリンピックの影響で地域の卓球サークルに参加するようになりました。次は試合に出ることかな〜(中澤)
- 先日免許の更新にて、数年前の自分よりふくよかになったことがショックでした。この春はジョギングに励みたいと思います。(井筒)
- 大学生活4年分の模型やプレボ。この春は気持ちを新たにするために断捨離しつつ、作品のブラッシュアップに励みたいです。(長谷川)
- 気候もよくなるタイミング、きちんと休みをとって子供としっかり遊ぶ、ことにチャレンジしたいと思っています。(会田)
- いつも娘に点ててもらっている抹茶。そろそろキチンと作法を勉強してみたいくなりました。(市村)

編集 : 公益社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会
委員長 : 市村宏文
副委員長 : 中澤克秀
委員 : 会田友朗・吉田 満・望月厚司・関本竜太・長谷川理奈
編集長 : 関本竜太
副編集長 : 望月厚司・会田友朗
編集ワーキングメンバー : 広報委員+長澤 徹・有泉絵美・青木律典・佐久間達也・井筒悠斗・知見徹摩・立石博巳
編集・制作 : 南風舎

Bulletin 291 2022 春号
発行日 : 令和4年3月15日
発行人 : 大西摩弥
発行所 : 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA 館
Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294
印刷 : 株式会社 協進印刷

■JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧
・(公社) 日本建築家協会 (JIA) <http://www.jia.or.jp/>
・JIA 関東甲信越支部 <https://www.jia-kanto.org/>

防水事業

屋上からはじめる
カーボンニュートラル

屋根・屋上は、大きな可能性がひろがる空間です。
カーボンニュートラルの実現に向けた取り組みを、
屋上からのソリューションでお手伝いいたします。

+ Solar
太陽光発電

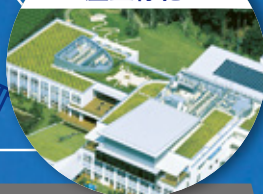


+ Thermo control
断熱・遮熱



Challenge to
reduce CO₂
emissions

+ Green
屋上緑化



高耐久
防水層

高耐久・高品質防水が改修サイクルを伸ばすことで
環境技術の付加価値を最大化します。



わたしたちは防水材と床材を通じて、
建物を雨から守り、人びとの足元を支え続けていきます。

床材事業

マティル クワトロシリーズ
MBE -554/557/560/563

複層ビニル床タイル

マティル
ウッドライン

新発売

2022年
3月22日

マティル・ウッドラインの
詳細についてはこちらを
ご確認ください。



シートやカーペットタイルも取り
揃えております。床材事業詳細は
こちらをご確認ください。



田島ルーフィング株式会社
<https://tajima.jp>

防水
事業

営業開発部
東京支店
多摩営業所
北関東営業所
横浜営業所
千葉営業所

TEL 03-6837-8910
TEL 03-6837-8888
TEL 042-503-9111
TEL 048-641-5590
TEL 045-651-5245
TEL 043-244-3711

床材
事業

床材営業開発
東京支店
新潟営業所
北関東営業所
横浜営業所
千葉営業所

TEL 03-5821-7760
TEL 03-5821-7760
TEL 025-211-0345
TEL 048-640-7320
TEL 045-212-4431
TEL 043-245-9911